
夜空のムコウ

天月 統夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜空のムコウ

【Nコード】

N4222I

【作者名】

天月 統夜

【あらすじ】

平凡な中学校、月並中学校に通う

へたれな男子、天野雄地。

毎日同じ日々の繰り返し、そんな日常に飽きていたころ

悪魔が目の前に現れる。

悪魔はお前には使命がある。と告げる。

そうしてしばらくして

自分の能力「パラレルワールド」に気付く。

あらゆる世界の中から

仲間を探しだし、最後の世界へ辿り着くことが
使命だと知り、冒険を始める。

第一章 天野雄地

俺は天野あまのゆうじ 雄地

中学3年生、15歳、誕生日は5月30日

もちろん男、身長は165cmで体重は49kg……ってどうでもいいか。

平凡な中学校 月並つきなみちゅうがっこう中学校に通っている。

その中でも、俺は特にへたれなほう……

高校なんていけないんじゃないか、といったところだ。

今日は月曜日、時刻は8時16分……って、

「やべえ！遅刻する！」

そう言つて、俺は走り出した。ひたすら。

ハッ、ハッと吐息がこぼれる。しかし、しんどくたつて学校に行かなければいけない。

しばらくして、何とか学校についた。

時刻は8時28分、よっしゃ、セーフ。

「ふう……」とため息をついた瞬間

「おい！！何してる！もうすぐチャイムがなるぞ！」と教師の声。んで、教室に入った。

それと同時にチャイムの音が鳴り響いた。キーンコーンコーン……

相変わらず人を舐めているかのような音、俺は気に入らなかった。

席についた、と同時に

「よー！ゆーじ、珍しく遅刻じゃなかったな〜」

つと先生の声、馴れ馴れしいなあと思つたら

皆いきなり大爆笑。まあ、俺はこのクラスじゃ人気者。

いじられキャラとしてね、思わず苦笑い。

そしてまたしばらくして、チャイムが鳴り響いた。

また、同じことの繰り返し、そんな日々がスタートした。

第二章 悪魔との出会い

授業が始まった。

1 時間目は国語、長い話はだるいと寝てしまった。

2 時間目は数学、式の公式、何だそれ。理解できず。

3 時間目は保健、病気について、これもまた寝てしまった。

4 時間目は英語、日本人だし英語は理解できず。俺だけかもしれないが。

そうやって、ぐだぐだしてたら学校はすぐ終わる。

本当に飽きる、くだらない日常。

「はあ〜…帰ってゲームでもするか」

ぼやきながら家に帰る。

「ただいまあ〜」

くたびれた声で言う。

…返事は無し。

「あれ？誰も居ないの〜？」

シーン……

「親父ー？母さん？」

呼んで気付いた、仕事だということに。

「兄貴ー…？」

兄は17歳の高校生、居ないようだ。

「おーい」

と言うと、数秒してから

「あ、おかえり〜」

と声がきこえた。

妹だった。妹は小学6年生。名前は凧っという。

「おー、ただいま」

家に妹が居るだけで落ちつくものだ。

自慢じゃあ無いが、妹はとっても可愛い。

きつと、俺が妹と血が繋がっていなかったら
すぐさま告白しただろう。なんてね。

そんなこと思いながら自室へ入る。

すると、何者かがベッドに座っていた。

「えーと、どちらさんでしょう」

おそろおそろきいてみた。

「ようやく帰ってきたか」

と何者かが立つ。

良くみると尻尾と羽根があった。

そうして、気付いたんだ…

コイツは…

人じゃない…！？

「誰だ！おまつ…」

口を手で塞がれた。

「フゴツ…ム…ゴツ」

抵抗できなかった。

「落ちつけ、俺は…」

そいつは、確かにこう言った。

「俺は、悪魔だ」

信じられるか？この世の中で

手を離された。

「……ッハ！ハア…何言ってるんだ……？」

信じれなかった。悪魔だなんて。

「……まあいい、お前には使命がある、それを伝えにきた」
悪魔と名乗るやつは、冷酷な眼で言った。

もちろん、俺には使命なんて何かわからなかった。

「何なんだよ…使命？意味わかんねえよ！」

悪魔と名乗るやつは、こう言った。

「いずれ気付く、ただ、お前には使命がある」

そう言っつて、悪魔と名乗るやつは窓から飛びたとうとした。

「待てよ！意味わかんねえつてば！使命つて」

「もう一度言っつ、お前には使命がある」

そう言っつて、窓から空へ飛びたつた。

俺は、気付いたら床に倒れていた。

第三章 パラレルワールド

「うっ…」

とりあえず床から立ち上がった。

頭が重たかった。

「…夢だったのか…?」

…そうして、しばらく辺りをみまわすと…

ここは俺の部屋じゃない!?

廃小屋のような場所だった。

「どこだよここ!」

「これがお前の能力だ」

背後を見ると、あの悪魔が立っていた。

「お前は…!ここは何だ!?夢なのか!？」

自分でもわかった、とても声が震えていたと。

「紛れもない現実だ、お前が自発的にこの世界へきた」

俺はすかさず言った。

「どういうことだよ!?!お前は何なんだ!能力って何なんだ!?!」

「俺の名はカオス、ある魔界の魔王の悪魔だ」

俺はある魔界という言葉だけでもひっかかった。

「は…?魔界…?魔王…!?!意味が…」

俺の言葉を遮って、悪魔は言った。

「お前の能力はパラレルワールドだ」

しばらくの沈黙が続いた。

…
…
…

「パラレルワールド？」

俺は本当にはかなのか、パラレルワールドの意味がわからなかった。

「簡単に説明してやる、黙ってきけ」

悪魔は近くにあった椅子にすわり、話し出した。

「パラレルワールドとは、ある世界から分岐し、それに並行して存在する別の世界だ」

「簡単に言つと、あらゆる世界があり、お前はそのあらゆる世界を
行き来できる」

「ちょっと待てよ！」

俺はどうしても腑に落ちなかった。

「俺は意識したこともない、それにそんなことありえ…」
遮って悪魔は言った

「お前は現にこの世界に来ている、ありえない等ということはあり
えない」

… 凶星だった。

この感覚は、幻覚や夢なんかじゃない。

確実に… 別世界…

「な… 何で俺がそんな能力を持つてるんだよ…?」

おそろおそろきいた

「それを説明するには、お前の前世の話をしないといけない」

俺はこんがらがっていた。

「前世? どういうことだよ…! 急にそんなこと言われてもわからね
えよ!」

「… お前が使命を理解し、旅をすればわかる」

俺は、悪魔が嫌いだ。

第四章 使命

「使命って何だよ？」

とりあえずきいてみない限りわからない。

「あらゆる世界を旅し、仲間を探しだすことだ、まずはなぜこいつはこんなにスラスラと答えられるのか。」

「…どういう意味？」

「お前と同じ、パラレルワールドの能力を持つ者を探せということだ」

「他にもいるのかよ…」

本当にわけがわからない。

「そして、7人の仲間を探しだした後…」

「最後の世界へ辿り着くことが使命だ」

最後の世界…！？ と言いたかったが悪魔が何か言いたいようなので止めた

「1000年に…一度だけだ」

「最後の世界へ、7人の選ばれし者が辿り着かなければいけない」
使命ってものがわかった。でもそれを認めるわけにはいかない。

「俺には、家族がいる、友達だって…そんな冒険してる暇はねえよ」
くだらない日々は退屈だが、家族と友達は大切だった。

「そういうわけにはいかない、俺は既にお前と契約している」

「は…！？何だよ契約って」

次から次へと謎が増える……うんざりだった。

「それもいずれ…だ、とりあえず一旦家へ帰れ」

俺はずっと悲しい表情をしていたに違いない。

「詳しくは後日でいいだろう、戻りたいと願え」

…戻りたい、違う。戻らなきゃいけないんだ。

なんて格好つけたことは言えなかった。

目を閉じて

戻りたい 戻りたい 戻りたい。

そうやって必死に願った。

目を開けると

ベッドの上で寝ていた。

第五章 胸騒ぎ

ベッドから身をおこし、時間を確認した。
午後7時20分 そろそろ飯の時間だった。

「ふわあああ……」

長き眠りから覚めたかのような、長い欠伸がでた。

「お兄、ご飯だよー」

妹の声が聞こえた。

「わかった、すぐ行くよ」

俺はタオルで顔の汗を拭って、リビングへ行った。
席につくと、親父と、妹しかいなかった。

「あれ？母さんと兄貴は？」

「お母さんは残業、お兄ちゃんは泊まりだつてさ」

妹が答えた。親父は黙って飯を食べていた。

「親父、何かあったの？」

元気が無いと、心配になる。

こっちはさつきまでの出来事が不思議すぎてたまらないっていうの
に……

「いや、どうも嫌な胸騒ぎがしてな」

親父は深刻な顔で答えた。

「はは、何だよそれ」

俺は苦笑いしかできなかった。

「お兄、後で話いい？」

珍しく妹が切り出してきた。

妹は俺のことをお兄と呼ぶが、一番上の兄はお兄ちゃんと呼ぶ。

「ああ、いいよ、宿題か？何でも教えてやるぞ」

「お兄は勉強できないでしょー」

妹が笑いだす。親父も少し笑っていた。
実は胸騒ぎが俺もする。なんて言えなかった。
きつと、理由は違うから…

「そつだ、受験生なんだからちゃんと勉強しろよ」

親父が勉強について言ってくるのは、俺の様子をみるためだった。

「うん、まあまあ…地道にやってるよ」

…もし悪魔の言うとおりには冒険したら、もう学校には…と
思っていた。

「ごちそうさま」

俺はすぐ食い終わった。

そして、自分の部屋に戻った。

30分ほど考え事をしていたら妹が部屋にやってきた。

「お兄、いま、いいかな…」

「ん、ああ、何？」

まさか本当に宿題じゃないだろうなと思った。

「あのね、その…えつと」

「何だよ、遠慮はいらないんだぞ？」

おどおどされると反応に困る。

「今日、一緒に寝ていい…？」

…どこの小学生だ、いや。小学6年生だった。

「どうしたんだよ？珍しいな…」

心の中では嬉しかった俺が少し恥ずかしい

「なんか、胸騒ぎが…お兄はしないの？」

どこかの小説で読んだことがある。

一家のほとんどの人が胸騒ぎがして…

続きが思い出せなかった。

「まあ…いいよ、俺も何も感じないわけではないし」

「うん、ありがと、じゃあ…後でくるね
そう言っって部屋から出ていった。

「胸騒ぎ…か、何が…」

俺は、すぐ後悔することになるなんて、思ってもいなかった。

第六章 悪魔との再会

しばらくして妹は眠りについた。

俺はたくさん疑問があり

心の整理をする時間と思って考えにふけていた。

「パラレルワールド…使命…悪魔…胸騒ぎ」

俺は考え事をすぐに口にだしてしまふ性格なのかもしれない。

……夢だつたらいいのに。

そんなことを思っても、紛れもない現実を変えることはできない。

「パラレルワールド…どれくらいの世界があるんだろう……」

つい、口にてしてしまう。

悪魔に質問しても、きっと全ての疑問に詳しい回答はくれないだろう。

あいつは、俺の能力を教え、使命を告げる。ただそれだけの役なのだろうか。

そもそも、あいつは俺と契約したと言っていたが、俺にはそんな記憶がない。

つまり俺はあいつのことを知らない、いきなり現れて……

そう考えているうちに、何者かの気配を感じた。

「悪魔か？」

俺は妹を起こさないうち、小声で言った。

「ああ、お前の疑問についてを答えるためにきた」

そう言つて、悪魔は俺の妹を見た。妹はすっかり熟睡している。

まるで…胸騒ぎを感じたのが嘘だつたかのように。親父はどうだろうか。

「気にしないで、きつと、小声で喋ってりゃ起きやしない」

「それより、さっさと俺の質問に答えてほしい……」

俺は悪魔の返答をきくまえに、質問をした」

「俺はなぜ特殊な能力を持っているんだ？」

これが、一番気になることだった。だって、俺みたいな平凡なやつにパラレルワールドなんて…未だに疑ってしまう。

「お前の前世について、話そう」

俺は黙ってきいていた。

「1000年に一度、最後の世界に辿りつかなければいけない」

「その理由が、最後の世界である魔王を倒さなければ全ての世界が崩壊するからだ」

「1000年に一度のみ、よみがえる魔王をな」

「そして、代々選ばれし7人の者たちが魔王を倒してきた」

「しかし、魔王を完全にほふることはできない、それぐらい魔王の能力は特殊だった」

「その選ばれし7人のうちの一人が、お前の前世の人間だ」

俺がなぜ能力を持っているのかの答えにはなっていなかった。

「最後の世界…パラレルワールドはたくさんあるんだろ？」

「もちろんだ、無限とっていいほど」

「だが、案ずることはない…」

俺はとりあえず、悪魔の話を書いておこう。

そしたら徐々に理解できるはず…と思うほどまでになっていた。

「行くべき世界は、10に選ばれている」

「……説明する前に、まずお前にはある地図を探してもらおう」

「…ある地図？何だよそれ」

「お前に一度、前世の自分に会ってもらおう、前世のお前が在処を知っている」

「！？そんなことができるのかよ…？」

「一度だけだが可能だ、俺は前世のお前と契約をしている、今のお前にも引き継がれている」

「俺は、死んだ契約者を一度呼び出すことができる」

俺は信じれなかった。いくら信じようとしても…

「どつやっ…！？お前は何でそんな力を持つてるんだよ…？」

「俺のことは世界を旅する内にわかるだろう、いいか、呼び出すぞ」

まばゆい閃光が走る。

気がつけば、俺の目の前には、まるで未来の自分のような人物が立っていた。

第七章 前世の自分と世界の地図、そして…

「こいつが…俺の前世…？」

俺は動揺を隠しきれなかった。

冷や汗がでる、目が震える。

「…久しいな、天野あまのたけの 猛」

「…そうか、ここは現世か」

俺の前世の人間、天野 猛は言った。

「久しぶりだな、カオス…と、俺か？」

前世の俺は、俺とは比べようにならないほど冷静そうだった。

「前世の…俺…」

続きを言おうとすると、前世の俺は言った

「何で此処にいま、呼び出した？カオスの術は一度しか使えないはず」

「緊迫した場面でもない、……ということだ」

悪魔は答えた。

「地図の在処だ、それ以外で頼ることは許されないからな」

俺には意味がわからなかった。しかし黙ってきいていた。

「なるほど、そっぴやそうだったな」

そう言っつて、前世の俺は微笑した

「俺が持つてるぜ、ホラよ」

そっぴやっつて俺に巻物を投げ渡した。

「これが…地図…？」

俺は巻物を開けた。

「探す手間が省けたな」

悪魔が初めて微笑したのでみた。

巻物を開けると、地図がはりつけてあった。

「何だ、コレ？」

地図には1つの大陸が記されていただけだった。それも右端に。

「これは世界の地図だ、パラレルワールドで別世界に移動するための場所の在処さ」

前世の俺はすらすらと言った。

「1つの大陸が記してあるだけだけど…」

おそろおそろ言った。

「冒険して、鍵を集めるたびに地図に大陸が増えていく」

悪魔が答えた。

その時、前世の俺の身体が透けていつていた。

「何だ、もう時間が…」

前世の俺は悲しげな表情をしていた。

「いいか、仲間を探して、最後の世界へたどりつけ」

「困難な冒険になる、しかし、自分の力を見出していけ」

そう言つて、前世の俺は完全に消えさつた。

「俺は…違う…俺の使命……」

前世の自分にまで言われて、気がついた。

俺は、絶対に最後の世界へたどりつかなければいけない。

…でない、世界が崩壊する。

「その地図に記されている大陸に行く方法を教える」

悪魔は急に言ってきた。

「大陸の上に手をかざし、意識しろ、自分の存在を、世界を」

そんなことを言われても…といつもなら思っていただろう。

でも、今はなぜかわかる。

「地図を使わなければパラレルワールドの能力は真の力を発揮しな

い」

「意味のわからない世界へ飛ぶことを避けるために、地図を先人が

つくつた」

その時だった。

妹が、目覚めていたことに気付かなかつた。

…あれだけまばゆい閃光がはしって、あれだけ話していたんだ、当然のことかもしれない。

「…カオス……」

妹は確かにそう言った。

さっきの話をきいていた？違う、今のは…確実に悪魔を知っているかのようにだった。

「…俺が目視できるのか、お前は…」

悪魔は驚いているかのようにだった。

「後回しにしようと思ったが、これは好都合だ」

「どうやら、前世の記憶が目覚め、理解できたらしいな」

「!?!? どういうことだよ、悪魔!」

俺は…もうわかっていた。

でも、直視したくなかった。まさか…

妹が、選ばれし7人のうちの、一人だなんて。

「少し、ね、」

ありえない、信じれない。

選ばれし7人、つまり妹も…

パラレルワールドの能力者

「凧…いつから…」

俺はその時、ものすごく背筋が寒かった。

「さっき、閃光がはしったときに…前世の映像みたいなのが頭にはいつてきて…」

「話をきいてて確信できた、自分がどういう人間なのかを…」

「これで2人、後の5人は別世界だ」

悪魔は知っているかのように…いや、知っていた。

…最悪だった。

冒険をする覚悟が少しできていた。

なのに、妹が…選ばれし7人のうちの一人

つまり、俺は自分の妹を巻き込む形に…してしまったのか？

避けられぬ運命だったのか、俺は、一緒に寝ようとしたことを後悔した。

これ以上の後悔と、災難が、これからどんどんやってくるかもしれない。

そう考えると、俺は絶望感にうちひしがれた気がした。

「お兄、どうしたの？」

妹にそう言われて気がついた

俺は、涙を流していた。

第八章 新大陸へ

「で、新大陸へ行つて、どうすればいいんだ？」

今日は火曜日……だが、幸か不幸か学校は休みだった。

「次の大陸の在処を知るためには、鍵が必要となる」

「つまりパラレルワールドの、新たな大陸を知るためには鍵が無ければいけない」

「…鍵？鍵って何なんだ？」

さつきから俺は質問攻めに行っている。

それは、新大陸へ行くための知識をつけるためだ。

「ちなみに、新大陸がどんな世界かは俺にもわからない、常に変わる世界だからな」

悪魔は豆知識というか、何でも詳しく教えてくれた。

「……本題から逸れていたな、鍵とはその名の通り、世界のキーになるものをさす」

「新大陸へ行き、ある条件を満たすと次の世界が地図に記される」

俺は、新大陸にどのような危険があるかはきかないようにしていた。どうせ冒険なら、スリルがあるほうが楽しい。なんてね…

「そのある条件ってのは？」

悪魔は察しが悪いなというように俺の顔を見る。

「何が条件かはわからない…大陸によって違うからな」

悪くない、つまりほとんど謎だが、冒険のしがいがある。

俺はもうすっかり乗り気だった。妹を巻き込みたくはないけれど。

「……じゃあ、新大陸へ行つていいか!？」

俺はくつてかかるようにきいた。とても興奮しているのが自分でわかる。

「その前に、説明がある」

悪魔は常に冷静に答える。前までは冷酷ととっていたが。

「…新大陸の危険は自分で知る方がいい、だが俺としてはお前を死

なせるわけにはいかない」

「……俺を死なせるわけにはいかない？ そんなに……危険？」

俺はきつと、今へっぴり腰になっているだろう。

「お前は俺の契約者だ、契約者が死ぬと俺も死ぬからな」

初耳だった。でもそうだとすると疑問が残る。

「……なら、前世の俺が死んだ時に……消えてるはずじゃ」

「前世のお前は、寿命で死んだ、寿命の場合は俺は死なない」

「しかし、お前が事故、または殺害されたなんてことがあったら俺も死ぬ」

前世の俺は寿命で死んだと知って、なぜかやすらいだ。

俺は冒険で死ぬことないんだと思っっているからか。

「……次は武具の話をする、敵と戦闘する場合もあるからな、知識をつけてもらう」

「え……！？ 戦闘って！」

へたれの中のへたれ、へたれ オブ へたれ の俺が戦うなんて無理だ。

「武具には俺を使ってもらおう」

お前はふざけているのか、なんてとても言えない。

「……どういうこと？」

「俺にはあらゆる能力が備わっている、中でも変身能力が一番備わっている」

驚いた、何でお前が魔王を倒さない。そんなことは言えない。

それと、選ばれし7人が必要な理由はまだ大きくべきではないと判断した。

「武器や、防具に変身できるってこと？」

「そうだ、実戦が一番わかりやすいが……」

実戦なんてゴメンだ、でも、魔王を倒すってことは……

「とにかく、新大陸へ行つてからがいいだろう、全ては」

「地図に手をかざせ、さあ、行くぞ」

質問はまだあったが、仕方ない

「なるようになれ！」

そういつて、俺と悪魔。それにずっとだんまりしていた妹は新たな新大陸へ旅立つのであった。

胸騒ぎは、まだおさまっていなかった。

第九章 オルデスト大陸

目を開けると、とても広い大地が広がっていた。

「どこだ…ここ」

見渡す限りが大地と岩の塊の集まりだった。

「お兄、あれ！」

振り向くと、神殿があった。

神殿というよりは、現世でいう教会のようなものだ。

その神殿は、遠くからみた感じではどこか古臭いような気がした。

「……ここは、オルデスト大陸だ」

「！知ってるのかよ」

「ああ、1000年ぶりだ」

ということとは、前世の俺と来た場所なのだろうか。

「でも、何でお前はそんなに昔から…」

俺が質問しようとする、悪魔が静かにしろと言った。

そして岩の塊に隠れさせられた。

「あれを見る、この大陸のある王の、右腕と呼ばれている」

ゴクリと生唾を飲んでしまった。

その王の右腕とやらは、馬に乗り、鉄仮面をしていて、おまけに後ろに100人はくだらないというほどの騎兵を連れていた。

「この大陸は、外界との関わりを断っている」

「そのため、見つかると厄介だ」

俺はこの世界がどういったものか、何となくわかった気がした。

「何で、武装してるの？」

妹が珍しく話した。いつも黙って考察する性格だった。

「…この大陸は同じ大陸内で二つの国が戦争をしているからだ」

この世界は、戦争中なのか…と俺は恐怖を覚えた。妹もそのようだった。

「でも、1000年もたったんだろ？なのに何で支配者の王だとか

右腕だとかわかるんだ？」

「あの鉄仮面の男のことを俺は知っている、1000年前から、それだけだ」

「1000年間以上生きてるのか！？あの鉄仮面…人間じゃないのか？」

1000年以上生きているなんて悪い冗談だ。悪魔でもない…

「あいつは、悪魔と人間のハーフだ、悪魔の生命力を持っている」

「悪魔と人間で、子供ができるんだ…」

妹はそう言って、げげんな顔をしていた。

「…この世界の鍵は何なんだろう」

頭の中で思っただつもりが、声になって出てしまった。

「とりあえずこの国の王に会う必要があるな、戦争に巻き込まれる暇はない」

空気が読めないのかという目で見られると思ったら、意外とまともな返答がかえってきて驚いた。

「この国の王って…そいつも1000年以上生きてる…とか？」

「正式には、この国の魔王だ」

何気ない顔で悪魔はそう言った。

「え！？魔王って最後の世界で…え？」

混乱する。どういふことかわからない。

「あらゆる世界に魔王は居る、大陸にも、それだけだ」

すぐ納得してしまった俺は、もう現実じゃまともに生きていけない気がした。

…いや、もとからまともではなかったのかもしれない。

「みてみたいなあ、その国の王に会いにいこう？」

妹はほとんど語尾疑問形にする。

「ああ、だがその前に神殿に入るぞ」

俺が言いたかったことを悪魔は言ってくれた。

そして、神殿の扉を開けた、中は古びた教会のようなものだった。しかし、人気もなく、何もないうだった。

その時だった。

「誰だ、貴様らは！」

振り向くと、あの鉄仮面だった。

短い人生だったな…とふと思ってしまった。

「…久しいな、黒騎士」

「…!!…貴様、カオスか、なぜこのような場所にいる！」

やはり知り合いだっただのか。と思った。

前の会話からわかっていたことだったが。

「1000年に一度の時が、今日でな」

きつと、悪魔がこの大陸に一緒にきてくれてなければ俺と妹は死んでいただろう。

黒騎士という鉄仮面の男は、今にも人を斬りそうな殺気を放っている気がした。

「わかっていると思うがこの大陸は戦争中だ、御遊びに付き合う暇はない！」

何という台詞だろうか、遊びなんかじゃない。

悪魔の言うことが本当なら、最後の世界で魔王を倒さないと世界は滅びる。

「さつさと、用を済ませたい、王に会わせてくれないか」

悪魔が本題にきりだしてくれた。こういうときは本当に助かる。

「…王に何の用があるというのだ」

「戦争に巻き込まれない為にも早急に用事を済ませたい」

「これは、大変急ぎの用であり、部外者に話すわけにはいかない」

悪魔がそう言った時だった、黒騎士が悪魔に斬りかかろうとした。

「貴様！我を侮辱しておるのか!!」

その時、後ろから銃声が鳴り響いた。

誰もが、背後を見た。

「…巻き込まれるのは嫌だったんだがな」

「冗談じゃねえよ…何だよあれ…！」

200メートル先ほどに、騎兵の大群が1000人はくだらないほど居た。

第十章 覚醒

ドーン！

大きな銃声が空へはなたれる。

空気が振動して、音が伝わってくる。

「動くな、お前らは完全に包囲されている」

向こう側の指揮官だろうか、身の丈ほどある銃を持っている。

「包囲だと…まさか、なぜ貴様らがこの国の領土へ入れた!？」

「おい、戦争だぞ？ヨードンで始めるとでも思ってたのか？」

向こう側の指揮官のような男と黒騎士がやり取りをしている間

他の騎兵達は一步も動かない。俺は震えが止まらないっていうのに。

「くそう…この砂漠で、この戦力の差、万事休すか！」

黒騎士が言わずとも、皆がわかっていたようだった。

1000数人Vs1000人近く、冗談の度を超えている。

「おい悪魔！このままじゃ巻き込まれるって！」

俺は死ぬなんてゴメンだった。もちろん、妹だって。

でも…違う…巻き込まれるとかじゃない。

「…この戦争に俺は関わるわけにはいかない」

俺と悪魔がこんなやり取りをしている間にも、戦が今にも始まりそ

うな

秀困気を漂わせていた。

「俺はあくまでも、お前を生かすことを優先する」

「戦争でいつ死ぬか、それとも、逃げるか」

悪魔がこんなやつだとは思っていなかった。

「俺は…へたれだ、俺は弱い、でも…！」

「目の前の災難から、逃げ出すほどへたれに育てられた覚えはねえ

よ…！」

こんなこと言うつもりはなかった。でも言葉に出てしまう。

「ここで詰まるようじゃ…最後の世界で魔王を倒すなんて無理だろ

「！」

…言ってしまった。

本当は怖い。でも、なぜか言ってしまったんだ。

悪魔は無表情で俺を見ていた。何を感じているのか。

「…お前は、勝ちたいのか？」

「……………へ？」

「お前は、強くなりたいのか？」

「…俺は……………」

どうなんだ…俺は、このまま逃げ出すのか？

でも…こんな場所で逃げるようじゃダメなんだ…

「…ちたい…なりたい……………」

俺は…俺は……………！！

「勝ちたい！強くならなきゃいけないんだよ！！」

その時、俺の身体をまばゆい光が包んだ。

暖かい、優しい…何だろう。

俺は……………いつまでも弱虫じゃいけないんだ。

飛びたつ時がきたんだ、成長する時が…

「何だ！？あの光は！！！」

「何者だこいつ…！！？」

「……………ようやく、目覚めたか」

…己の力、選ばれし者には、覚悟の分だけ無限に力が上がる。

…見える、わかる。

力を感じる、自分から。

「撃て！あいつを撃て！！」

敵の指揮官だ、この声は…俺を狙っているのか。

当然だ、目立ちすぎた。

まさか全身から光が出るなんてな。

ドンドン！

銃声が鳴り響く…何だろう、銃の玉がゆっくりこっちに向かってきている。

…違う、周りがみんな遅く感じる。これは…

キュンキュン！ 何か銃弾をはじいた。

あれは…漆黒の翼……悪魔か。

「俺を武器に使え、念じろ、想像しろ」

俺の…想つ武器……武器なんて何があるか知らない…

ドンドン…！

銃声が鳴り響く

「時間が無い、早くしろ！」

「くっそおおおお…！」

自発的にだろうか、俺は銃弾を斬っていた。

これは…日本刀？

そうか、これは…

全てを洗礼する力…

-
-
あまのむすくも
天叢雲剣！！

第十一章 初めての戦い

「俺をうまく使い、敵を倒せ」

「剣に変身しても喋れるのかよ…」

俺は天叢雲剣を相手の指揮官に向けて構えた。
あまのむすぶくも

剣は重たかった、しかしなぜか軽々持てるように動かせる。

「さっきまでの威勢はどうしたんだよ」

俺は相手を挑発し、相手から向かってきたところを

返り討ちにしようと考えた。

「死なない程度に遊んでやるよ、きな！」

「ふざけるな、糞ガキが！！」

狙い通り、銃を構えながらも突っ込んできた。

といつても、数が多すぎる。これではどうしようもない。

「ええい、怯むな！王の右腕の我が指揮をとり、相手を攪乱し勝利をつかむ！」

鉄仮面の男、黒騎士はどうもやる気だ。

しかし、自分の力を試すためには、邪魔だった。

「手を出すな！」

悪魔が言った、そして俺はとっさにある作戦を思いついた。

「…俺が一人でこいつらに勝ったら、王のもとへ案内してくれ」

もう後へは引けない、覚悟を示すためでもあった。

「何を…！？」

「いいから、約束だぜ！」

さて、どうする。

向かってくる相手を一人一人相手にするのは無理だ。

そこで脳に直接話しかけられるような感覚で声がきこえた。

（大丈夫だ、臆するな、よくきけ）

悪魔の声だった、脳に直接語りかけられるようだ。

（イメージしろ、斬撃をとばすイメージを）

(イメージして、剣をふれ、現実になる)

どういうことだよ!と思ったが、もう敵は迫ってきている。

(覚悟を力に変える!名前は)

「うおおおおおおお!」

風魔一閃!!

剣を振り下ろす、斬撃をとばすイメージ…

強大な風の塊のようなものが振り下ろした方向へとんでゆく。

ドーン!!と音をたて、煙で前が見えなくなる。

(よくやったな、それがイメージを現実にする投影術のようなものだ)

(あらゆるイメージを放つことができる、忘れるな)

「…スゲエ」

思わず自分で声をあげてしまう。

そして、しばらくして煙がさった。

相手は全員倒れていた。

「……見事、約束はまもろつ、お前たちを王都へ案内する」

疲れ果てた俺は、その言葉をきいた瞬間倒れてしまった。

第十二章 王都ベネジスト

目を開けると、どこかの寝室にいた。

どれくらい眠っていたのだろうか。頭が重たい。

「お兄、だいじょうぶ？」

まるでずっと看病していたかのような顔だった。

「…ここは？」

「王都、ベネジストってところ」

眠っている間についているとは思ってもいなかった。

「…あの悪魔は？」

「カオスなら、王に面会しにいつてる」

…妹はよくカオスと名前で呼べる。

妹に少しよみがえった前世の記憶とはどんなものだったのだろうか。

「…なあ、何で選ばれし7人が最後の世界に辿りつかないといけな
いかわかるか？」

ぶしつけな質問だったのだろう。妹は少し戸惑っていた。

「7人が最後の世界で魔王を倒さないと…世界が滅びる…から？」
本当に語尾疑問形が好きだな。と言いたかったが小学生にはわからないだろう。

「その7人じゃなきゃいけない理由ってのがな…」
その時、寝室のドアが開いた。

「目が覚めたか、王がお呼びだ」

鉄仮面の男、黒騎士だった。

今思うと、この大陸の魔王の右腕と称されるほどなら
あの時一人でも勝てたんじゃないか。と思う。

…ふとこの王は弱いのかと判断してしまう。

「わかった、今行く、それと…」

王都へ連れてきてありがとうと言おうとしたが

黒騎士は察したのかすぐさま去って行った。

「んじゃ、行くか」

「只今、連れてきました、王様」

鉄仮面でおじぎをすると、どうも怖い。

「うむ、よくぞきたな、選ばれし者達よ」

遠すぎて顔がよく見えなかった。

それほど、広がった。

「面をあげいっ！黒騎士よ、外の警備へあたれ」

「ツハ！ただちに！」

流石に王と言ったところか…雰囲気はあった。

でも、どうにも迫力が無かった。まるで…子供みただった。

「さて、本題へうつる」

悪魔、カオスの声だった。

「貴殿らは、鍵を探しておるのだな」

王は、既に悪魔から話をきいていたのだろう。

スムーズに事が進みそうで、少し安心した。

「フン、この大陸の鍵はおそらく…戦争だな」

「1000年前もそうだったな、ククク…」

いやらしい笑い声だ。

1000年前の鍵は戦争だった…？

悪魔からはまったくきいていない情報。

それどころか、戦争に巻き込まれるのは嫌がっていた。

「やはりか、大体の察しはついていたがな」

冗談じゃない、悪魔の、あの微笑な顔は、知っていたとしか思えない。

「面倒なんだがな、ここの戦争はどうも」

「仕方なからう、他に鍵はありえんな、1000年前と同じだ」

「むここの国の魔王を倒せばいいだけの話だ、簡単だろう？」

…魔王を倒す？何なんだ一体、はじめの大陸でそんな…

おまけに戦争だなんて、山あり山ありまた山ありといったところか。

「確かに仕方がないな、全面戦争まで後何日あるかわからないが…」

「その間に、修行だな」

悪魔はなぜか嬉しそうだった。

「自由にしろ、世界が滅びるわけにはいかん、お前らに懸っている」

「期待しておるぞ、選ばれし者達よ…ククク」

どちらにせよ、最後の世界へ辿り着くまでの道は長いだろう。

その間に戦闘スキルをあげなければいけないのは事実だ。

「ならばさっそく、修行の間で修業だ」

休む間もなく、地獄の修行が幕を開ける。

第十三章 修行の幕開け

修行の間、とやらについた。

王都のとても深い地下にあるようだ。

「基本的な戦闘スキルを身につけてもらう、これから戦争までずっと修行だ」

悪魔はやる気が満々だった。

「…で、修行って何をするんだ？」

「一言で言つと、イメージだ」

「イメージ？…どういうことだ？」

「砂漠での戦闘の時間を覚えていないのか？イメージを具現化する能力をお前は持っている」

「…といっても、現世以外ではほとんどのやつがその力を持っているが」

…そこで、思い出した。

剣から斬撃をとばすイメージを。

「イメージをコントロールさせ、力を安定させる修行をする」

「この前のように、全力の斬撃等とばすと、精神的にダウンするからな」

それで、俺は倒れたのだろうか？

あの時は、ともかく限界が来た感じがした。

「じゃあ、私は……？」

「お前には防衛術を身につけてもらう、詳しい説明は後だ」
妹を戦わせるなんてゴメンだ、そう思っていたが

護りの術が覚えられるのなら、それは是非覚えてもらいたい。

「まずは、お前からだ、天野 あまのゆづ 雄地」

はじめてフルネームで呼ばれてビクツとした。

「初めに、リングの使い方を教えておく」

「リング？鼻輪？」

「…指輪だ、魔法石が埋め込まれている特殊な指輪のことだ」

…鼻輪だなんて、恥ずかしいことを言ってしまった。
思わず苦笑いをしてしまう。

「このリングを使ってもらう」

悪魔は指輪を俺の方へ投げた。

…見た目は極普通の指輪だった。中心には紅色の石が埋め込まれて
いた。

「烈火の石れつかがといって、全世界を含めてもおそらく5つほどしかない
神器だ」

とても高価な物らしい、紅色の石はとても綺麗だった。

「…これを、どうやって使うんだ？」

「どこでもいい、好きな指にはめる、大きさは自然に合うようにな
っている」

右手の人差し指にはめた。少しセレブにでもなった気持ちだった。

「そのリングの効果は、炎魔法の威力の強化だ」

…炎魔法？イメージを具現化することは、魔法というのだろうか。

「…炎のイメージができるまで、一人だ」

「そして威力の加減や、使い道を覚える、じゃないと負担がかかっ
てお前は死ぬ」

「！？マジかよ…」

イメージなんて無茶だ、頭の中で描くというのは案外難しい。

それに、加減を調節する…使い道……難題だった。

「次に、天野あまのなき 凧しんえん…お前だ」

「お前は、深淵しんえんの石が埋め込まれているリングを渡す」

「そのリングは、別名では死デスの指輪リングとも呼ばれている」

「使い方によって、死の魔法と、生の魔法になる」

「……使い方って、イメージ？」

「そうだ、決して憎悪の念を抱いて使ってはいけない」

妹が心配だが、俺は必至に脳裏に炎のイメージをいだいていた。イメージができれば、投影するイメージをするつもりだった。

「回復魔法や、防御魔法が死の魔法にならないようにうまく扱え」

「まずは脳内に、バリアを描け、できるだけ円状で透明なものが好ましい」

死の魔法へならないためにも、しばらく俺がつく。

「わかった、やってみる……」

リングでの修行が始まる。

……胸騒ぎはまだ止まっではいなかった。

第十四章 リング

頭の中で炎をイメージする。

…いける、今なら。

「うおおおおー!!」

リングに炎が灯されたのがみえた。

「…紅色の炎……?」

このリングにためた力を、放出する。

イメージ通りに……

ドーーーーーン!!

炎がうねりをあげ、爆発した。

威力の加減を覚えないといけないのか……

幸い、炎をとばす投影をしたので怪我はなかった。

しかし、思い通りにはいかなかった。

「…炎を調節するにはリングにためた炎を少しずつ放出することが
肝心だ」

そう言い残して、悪魔は凧と別の場所に修行へ行っただ。

それから、何度も何度も

莫大な量の炎をイメージし、リングに炎を灯し

少しずつ放出するように心がけた。

もちろん、簡単にはいかなかった。

戦争が始まるまでに、最低限でも

イメージを具現化する力をマスターしろと言われている。
……リングがなくても投影はできるが、リングがなければ
威力は低くなる。

だが、リングを使つての投影はとても難しい。

「始めからうまくできる奴などおらん、誰もが努力をし、成長する
のだ」

あの、鉄仮面の黒騎士だった。

「…努力しても、実らないやつだっている」

俺は悲観的だった。

こんなこと言つつもりはなかった、しかし言つてしまった。

「そのとおりだ」

…慰めなんて、くれるわけではないか、いや、同情が欲しかったわけ
じゃない。

「しかし、成功していった奴は誰もが努力をしている」

…そのとおりだった。

プロ野球選手で練習をしていなかった人なんて居ない。

サッカー選手だって、バレー選手だって……

「…貴様はまだ若い、うまくいかぬのが人生だ」

「だが、選ばれし7人の使命から逃げることはできない！」

……ちょうど良い機会だった。

「選ばれし7人じゃなきゃいけない理由って何なんだ…？」

「強いやつなんて、山ほどいるだろ？そもそも選ばれし7人つてど
ういうことだよ」

パラレルワールドの能力なら、あの悪魔も持っている。

それは確信していた。もしかすると他にも持っているやつがいるか
もしれない。

「初めて選ばれし7人を選んだのは、全知全能の神だといわれている
る」

「全知全能の神と対立する魔王を倒すことが、貴様らの最後の目的

だ

答えになっていない。悪魔にきいても教えてくれない。だから、黒騎士にとことん追求しようと思っている。

「全知全能の神じゃ魔王を倒せないのか？」

「不可能だ、互角の戦いが三日三晩続いたと言われている」「だったら……」

俺が次の質問をしようとする

「ここから続きは我からは言えん、カオスの希望でな」

…くそつ、あの悪魔は何を考えているんだ……

「…ならこれだけでも、あの悪魔は何なんだ？…何で選ばれし7人を導こうと……」

「全知全能の神はカオスの愛人だ」

今まで生きていた中で一番驚いた。

…神が女だったなんて…そこじゃない。

どういうことなのだろう、悪魔と神が…？

その時、あの悪魔がきた。

「…調子はどうだ、リングの力を扱えるか？」

「……一応、後は放出をうまくするだけで」

黒騎士は去っていた。

…続きが気になったが、きいてはならない気がしていた。

「リングを通しての具現化は1日や2日でマスターできるものではない」

「しかし、お前の妹はもうできるようになってる」

…驚きが続く日だ、今日は……

「マジかよ…コツとかあるのかよ？いい加減一人じゃ無理だ」

「これは才能だ、お前には説明のしようがない」

つまり俺は才能無しで、説明しても、どうせ理解できないばかり扱いなのだろうか。

「お前は実戦で理解するのが一番早いと俺は判断した」

「これから黒騎士を呼んでくる、お前には黒騎士との実戦でマスタ

ーしてもらおう」

「は！？無理無理無理無理無理だつて！！」

冗談じゃない、あんな怖い鉄仮面と実戦だなんて！

「命の危機に達したとき、嫌でも目覚めるだろう、文句をたれるな
…つまり俺は死ぬ気で戦えと言われているのか。」

「このままではリングを使いこなせないだろう、黒騎士を呼んでく
る」

そういつて、悪魔はすぐさま消えた。

「はー…俺は死ぬのかな……」

口にてでしてしまう、震えが止まらないほどだ。

実戦でリングを使いこなせないと魔王になんて勝てっこない。

俺は、嫌でも覚悟を決めざるをえなかった。

黒騎士との戦いが、始まるうつとしている。

第十五章 黒騎士との戦い

悪魔はすぐに黒騎士を呼んできた。

「やる気が出たのは結構なことだ、協力致そう」

黒騎士が断ってくれていればどれだけ嬉しかったか。

「ルールか何かあるのか？まさか全力で戦っていいわけではあるまい」

「構わない、殺すつもりで戦ってやってくれ」

「！！俺は素手で戦うのかよ！？」

すかさず俺は言った。

「俺を使ってもらう、それにリングもあるだろう、焦るな」

「ならば手加減せず全力でいこう、我もリングを使わせてもらおう」

くそっ、やるしかねえか…

あまのむらくも
天叢雲剣！！

なぜか数年ぶりに持った気がした。

「準備はいいようだな」

黒騎士の黒い石が中心にあるリングがドス黒い炎を灯した。

とてつもない圧力が降りかかる。空気が重たく感じた。

「参る…」

黒騎士が高速で俺のほうに向かって突進してきた。

リングの炎を、黒刀に灯していた。

「くそっ！」

黒刀を振りかざす黒騎士の斬撃を天叢雲剣で無理やりに受けた。

「リングの炎を灯した黒刀を普通に受けていいのか？」

少しずつ押されていく。

見た目は細身なのに…重いつ！

「猿真似してやんよ…っ！」

案を思いついた。むこうが刀に炎を灯すならば。

「こつちだつて、炎を灯すことはできんだよ！」

「…！」

俺はとつさにリングに炎を灯した。

(いいぞ、俺に炎を灯せ、流し込むイメージでだ)

悪魔に言われなくても、わかってることだ。

「うらっ！」

ポツ！と音をたてて、天叢雲剣に紅色の炎が灯った。

「まさか…猿真似とはな」

(炎をもつと強く灯せ、俺が爆発することはない)

言われた通りに炎をどんどん強くしていった。

「貴様…！！！」

いつの間にか、少し力を入れるだけで黒騎士の黒刀を押せるようになっていた。

「黒刀か…案外、普通なんだな」

…：我の力をみくびるな！黒渦！ブラックホール！」

黒騎士のリングから黒い空間のようなものがでていく。

「何だ！？コレ…！！！」

俺はとつさに身を引いた。

ブラックウォール
「黒壁…展開！」

黒い空間が俺と黒騎士を包んでいく。

あつという間に、黒い壁に覆われ、黒い部屋ができた。

「デスマッチといこうじゃないか…」

「何だよ、この…」

喋って気がついた。

この空間の、酸素の薄さに。

「息が辛いであろう、当然のことだ、この部屋では酸素が限られている」

「冗談じゃねえ…！酸欠状態でのデスマッチかよ…！！？」

(…これではリングの炎を垂れ流しにはできん、生命エネルギーを無駄に消費するようなものだ)

「この部屋を壊すには、我を瀕死に追い込むしかないぞ…！」
そう言つて、黒騎士は黒刀の炎を消した。

「相変わらず趣味が悪いな、黒騎士」

悪魔が黒騎士にはなしだした、こいつは酸素を吸うのか…？

「早めに決着をつけたいであろう？もう時間もない…！」
時間がない、どういふことかきく暇もない。

ともかく、黒騎士を倒さないと…死ぬ。

「早めに決めるのに悪いことはねえ…！死んでも恨むなよ！」
俺は黒騎士に全速力で向かっていった。

黒騎士は微動だにしない。

斬れる…！

「ウラアアアッ！」

ギンツ、と鈍い音があった。

黒騎士は寸前で黒刀で俺の斬撃を受け止めていた。

「くそっ…！」

リングの炎が無いと、力では圧倒的になかなかつた。

すぐに剣をはじめかれ、次々と攻撃を入れられていく。

「どうした、もう息がもたないのか？」

悪い冗談だ。筋肉が少しずつ動かなくなってきたのがわかる。
身体が軋む、このままでは本当に俺は…死ぬ。

「そろそろ時間だ、終われ…！」

黒騎士に天叢雲剣を上にはじめかれ、俺は両腕を同時に上にあげられた。

黒騎士に斬られる刹那…かすかに感じた。

死ぬのか？

まだ、始まったばかりだ。

どうすれば 助かるんだ。

「リングに炎を灯せ、この空間を潰せ！投影しろ！」

悪魔の声……そうだ

この空間ごと、潰す。

そしたら、助かる。

「もう遅い！」

黒騎士…鉄仮面、むかつくやろうだ。

決めつけんじゃねえよ…まだ、まだこれからだ…

「うおおおおおおおおお！！！」

全力で俺はリングに炎を込めた。

全ての、力を。

ぶっ潰れちまえ、劫火に焼かれて…

投影する！

その瞬間、大爆発を起こした。

黒い空間を、紅色の炎が埋め尽くしていた。

「……ざまあみる……」

「ばかな……！！！」

力を出し切った俺は、倒れていた。

第十六章 宣戦布告

「うっ……」

目を覚ますと、修行の間で倒れていた。

「……ようやく目が覚めたか」

黒騎士の声だった。

「……俺は……？どうなったんだ……」

「ブラックウォール
黒壁から抜け出すが為に全精力を使ったのだろう」

「……もう少しで、我も貴様も死ぬところだった」

思い出した。

リングに全ての力を込めた。

全ての力を使いきるといふことは、死ぬ可能性があることだった。

「……そうだ！悪魔は……風、俺の妹は！？」

周囲をうかがっても見当たらなかった。

「安心しろ、魔王様のところへ戻っている」

「我らも戻るぞ、いつ戦争が始まってもおかしくはない」

それから、数十分で魔王の居る王室へついた。

「やっと帰ってきたか、待ちくたびれたぞ」

魔王は少し御立腹のようだ、それほど長く眠っていたのだろうか。

「申し訳ございません、して、戦況は……？」

「未だ始まっておらん、カオスと……風嬢に今戦場へ向かってもらっている」

「そなたらも、早く向かうことだな」

悪魔と風はもう行っているのか……

風の修行の成果が心配だった。本当に大丈夫なのか。

「はっ、行くぞ、雄地ゆつじとやら」

とやらは余計だっつーの……っと、行くか。

そして数時間ほど馬に乗り、戦場の砂漠へむかった。
幸い、おとなしい馬で、簡単に行くことができた。

「やっとついたか、いよいよだぞ」

「お兄、遅いよー」

…最前線には、敵兵が数十万はいた。おそろしい。

「悪い悪い…何で待機してるんだ？敵と向かい合わせになって」
「今にわかる、戦争がどういいうものか」

黒騎士は、敵と同等の数の兵を従えていた。

ブブブツ ブツ

「あーあー、こちら、ゼノン帝国！戦闘指揮官の白騎士である」

「これより、ベネジスト帝国へ宣戦布告をさせてもらうー！」

…白騎士？黒騎士…白騎士…何か関係があるのだろうか。

「長きに渡る！因縁の決着をつける時がきたのだ…！」
ぐだぐだ言いやがって、としか思えない。

「…因縁の決着と言ったのは、これで何回目だ？」

「とうに100回を超えている、カオス、貴様といえど無駄口をた
たくな！」

いよいよ緊迫した場面、か…魔王はどこにいるのやら。

「ゼノン帝国兵一同！一斉にかかれ！！」

「ベネジスト帝国兵一同！かかれ！！」

何の戦略も無しなのか…？これほど酷い場面はないだろう。
両軍が一斉に突っ込み合う。

「さて、俺達は魔王を探すためにこの戦況を突き進み…」

「ゼノン帝国へ行く、ひたすらまっすぐに進むだけだ」

「早めにくぐりぬけよう」

いよいよ、戦争が始まった。

第十七章 魔王ゼノン登場

「第三軍、第二軍に続け！」

「あれが、敵の大将、黒騎士だ！あいつを狙え！」
戦いは、止むことを知らない。

俺は少しずつ敵をかわして前へ前へと出ていった。

「ゼノン帝国まで、ずっと前進しろ」

それだけを言い残して、悪魔は空をとんでいった。

「我が援護する、気にせず突っ走るのだ！」

黒騎士はそう言ったが、敵の数が多いが故に
とても身動きがとれないといった様子だった。

俺もほとんど身動きがとれなかった。

相手の攻撃をかわすことと、戦況を見定めることで精一杯だった。

「お兄、空をとぶよ」

「は…？何言つてんだ？んなことできたら苦労しねえよ…っ！」
会話する暇すらほとんどなかった。

相手軍の攻撃は止まない。黒騎士の軍も頑張つてはいるが
人っ子一人を庇う余裕があるわけではなかった。

「大丈夫、リングの炎を利用すればとべるよ？」

妹は余裕気だった。

「そんな方法教えられる暇もなかったの！」

妹はなぜ相手の攻撃をくらわないのか。

その疑問は後回しにしようと思った。

俺には今、天叢雲剣あまのむらぐもがない。

大したコントロールができないのに、炎を使うわけにもいかなかった。
た。

「地面に向かつて、思いつきり炎をだすの！やってみて？」

このままじゃキリがない。言われた通りに…

大量の炎をイメージし、リングに炎を灯す。

「翼をつくって、炎で！」

悪魔より説明が下手な妹だと思ったが、イメージしようと思がけた。その時、とっさに悪魔の翼を思い出した。

大きな漆黒の翼、それをイメージした。

ドツ！と音をたて、自分の身体が宙に浮いたように感じた。

いや、実際に少しずつ浮いていった。

自分の背中をみようと思がけると、肩下から紅色の炎の翼がはえていた。

「お兄、空へとぶイメージをずっと続けて、リングに炎を送り込みながら！」

予想外に難しかった。

移動はままならなかった。しかし少しずつ慣れるのを実感していった。

「もう空へとぶ術を覚えるとはな、幸運を祈る！選ばれし者達よ」
黒騎士の見送り言葉をきいたところで、妹もリングに炎を灯し翼をつくりだした。

妹の翼は、黄緑色より少し黒い色をしていた。口ではあらかわせない。
「はやく、ゼノン帝国へいこ？」

「そういつて、妹はさっさととんでいった。」

俺もぎこちないながらに少しずつとんでいった。

しばらくして、ゼノン帝国の領土とおもわれるところについた。
とても大きな城が見えていた。漆黒の城だった。気味が悪い。

「遅かったな」

あの悪魔だった。

「…よく言えるぜ、空をとぶ方法まであっただなんて」

つい皮肉がでてしまった。

「教えると時間をくうと思ったからな、お前の妹も知っていたからほうっておいた」

本当に冷酷なやつだ。しかし、なぜか恨めはしなかった。

「あの城が、ゼノン城…？」

そびえたつ漆黒の城をみて妹が言った。

…あの城は相当な大きさだ、東京タワーより大きかった。

「いくぞ、魔王はすぐだ、戦争を終わらせるためにも魔王を討つ」

「ああ、急ごう…」

俺は、現世で今何日で何時なのかが気になっていた。

何日も家を兄妹であけるだなんて、親になんて言い訳をすればいいかわからなかった。

「その必要はない」

「！？誰だ…こいつ？」

目の前に、いきなり黒いマントを被った者があらわれた。

なぜか、空気が重たく感じた。

黒いマントの男から殺気が感じられた。

「ようこそ、選ばれし者達、それに…」

ここで俺は言葉を遮って言った。

「誰だ…お前は！なぜ俺達のことを知ってるんだ…？」

その時、悪魔は確かにこう言った。

あれは、魔王ゼノンだ。と…

「さすが、悪魔神力オス、お目が高いようだ、ふふふ」

「あれが…魔王…！？」

俺は恐怖を覚えた、冷たい声。死者のような動き。

「俺の事を知っているのか、ならばお前はここで倒されることを理解しているということだな」

悪魔神力オス、どういう意味なのだろうか、悪魔で…神？

デスブレス
死の息吹

黒いマントに覆われた顔の男が、そう言った。

「リングの炎で防御しろ！この息にふれるな…死ぬぞ！」
その瞬間、妹がリングに炎を灯した。

一瞬ににて、俺と妹はほぼ透明なバリアに覆われた。

「フン、何故効果を知っておるのかしらんが、つまらんな」

「バリアを維持しつつ攻撃しろ、やつは強い…心してかかれ」

悪魔は息にふれても大丈夫なようだった。

…いや、悪魔の半径2cmほど周辺には、息がとどいていなかった。

「内側からならバリアを無視して攻撃できるから、お兄お願いね？」
まだ未完成だが、仕方ない。

リングを使つての戦闘をしようと考えた。

「じゃあ、戦おうじゃないか、ふふふ」

デスサーベル
死の剣

魔王ゼノンは、黒刀のようなものに、ドス黒い炎を宿した。

俺はリングに炎を込めた。

「俺は、お前に勝って現世に帰る！」

魔王ゼノンとの戦いが、始まる。

第十八章 魔王ゼノンとの戦い

「我にそう簡単に勝てると思っ
ているのか？ふふふ、愚かな事だ」
魔王ゼノンは死の剣デスサーベルという黒刀にドス黒い炎を纏った
剣を悪魔の方へ向けた。

「…何の真似だ」

「おや…君は戦わないつもりか？クズ人間二人でこの魔王を倒せる
はずがなかるう？」

クズとは、よく言ってくれる。

俺はへたれと呼ばれるのはなれていたが、クズとは初めて言われた。
何より、妹をも侮辱することが許せなかった。

「悪魔！天叢雲剣に！」
あまのむらぐも

炎を無駄に消費して体力を尽くすよりも、天叢雲剣に炎を少しずつ
纏わせる良かった。

悪魔はすぐに俺の方へ瞬間移動のごとき移動をし、剣になった。

「始めるぞ、死の演舞を…」

魔王は俺に突進してきた。

「速いッ…！」

予想外の速さだった、かの鉄仮面よりも、速かった。

「君が鈍いのだよ」

そう言っ
て剣をさしてきた。

俺は剣に炎を纏わせ、少しずつはじくのがギリギリだった。

「…！これは驚いた、この黒刀をはじけるとは…よほど良い炎と
うかがえる」

「だが、あつけない幕引きだ」

あつけない幕引き？まだ何も終わって…

「お兄、後ろ…！」

「…！？」

とっさに俺はしゃがみこんだ、すると後ろから黒刀が迫ってくるの

がみえた。

「…小娘、何故幻術を見破れるというのだ…!?」

危なかった。黒刀が2本…違う、魔王が二人居た。

すると、一人魔王が消えた。

「厄介な、小娘だ…ふふふ、だがもがく様をみるのも一興…」

(あれは、魔王ゼノンのリングの効果で幻術をつくりだしている)

幻術…厄介なリングだと思った、しかし幻術に実体がある…?

(あれは一種の死の指輪デスリングのようだ、リングの炎を少し周囲に張り巡らせる)

(リングの炎で幻術の炎を察知するしかない、お前の妹もそうやって見破った)

くそ、初耳なことばかりだ。知識の無さが戦闘では命取りになる。

「…幻術とは、こそこそしてくれんじゃねーか！」

そういつつ、少しずつ目視がし辛い炎を周囲に張り巡らせていく。

(初めてにしては上出来だ、幻術を察知すれば炎にかなりの乱れが生じる、それで位置を割り出せる)

「さあ、どんどんいかせてもらおう…ふふふ」

「ちまちましてねーできやがれ！」

また魔王が突進してきた。

「今度はこつちからもいくぜ…！」

俺の周囲には幻術がないようだ、今が叩きこむチャンスだとみた。

「風魔一閃!!」

炎を注入した剣での斬撃は、予想外に大きかった。

「何…!?」

ドゴーンッ!!

大きく、鈍い音が鳴り響く。

「…やった……か？」

「リングの反応に幻術もない、勝ったよ！」

その時だった。

「最後まで油断してはいけないのが戦いというものだ」
いつの間にか、妹の背後に魔王は居た。

「凧!!後ろにバリアを!!」

「もう遅い…さらば、選ばれし者の一人よ、安らかに眠るが良い」

凧の心臓を、魔王の黒刀が貫く。

「…てめ…え…何してんだ……てめえ!!!!!!」

(…倒したのは幻術、本体は身を潜めていたか、通りでリングに反応がなかったわけだ)

「戦いとはこういうものだ、選ばれし者よ、貴様もじきにこうなる…ふふふ」

俺は全力で剣に炎を溜めた。

「風魔…一閃!!!!!!」

「愚かな、私情で全ての炎を斬撃に込めるとは」

「もはや貴様の負けは確定している、我の勝ちだ…選ばれし…」

「最後まで油断してはいけないのが戦いなんですよ？」
何かツタのようなものが魔王をおさえつける。

「!!!!!!何だ!!!!これは!!!!離れぬ!!!!誰だ貴様!!!!」

「便利だね、死の指輪^{デスリング}、幻術までつくれるなんてね」

「風…良かった……」

(とっさに身の危険を感じ、幻術を作り出していたか、やるやつだ)

「くそっ！！離れぬ…！！このままでは…！！」

「お前がクズといつていた人間の、一撃の痛みを知れ」
悪魔にセリフをとられた気分だった。

「うおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

魔王に風魔一閃が直撃する。

ドッゴーンッ！！

まるでビルが倒れたかのような音をたてた。

「…終わ…っ…た……」

力を使い果たした俺は、倒れた。

第十九章 帰還

目を覚ますと、あの教会に居た。

「目覚めたか、良くやったな…といっても魔王には逃げられたようだが」

悪魔と、妹、そして黒騎士が居た。

「貴様が魔王を倒したおかげで戦争は終了した、礼を言う」

「いてて…いいよ、礼なんて合わない、それより魔王に逃げられたつて…？」

「相手も流石に魔王だけある、あの時死の指輪デスリングの幻覚で斬撃をそらした」

そういえば、幻覚に実体があるようなのは何故なのだろう。

気になっていると、悪魔は察したのか話をしだした。

「有幻覚といって、炎を極度に高めてつくりだした幻覚にはほぼ実体とっていい」

…妹もあの時、幻覚を使っていた。

最近気付いたことがある。

人は死の危険に遭遇すると、信じられない程の力を発揮する、と…

「ともかく良くやってくれた、魔王は別世界へ逃げたようだ、完全勝利とは言えないが…」

また、魔王がくるかもしれない、そんなことを気にするより現世に帰れるかどうかを気にしていた。

「…地図を見て、お兄、きつと次の大陸が記されているはずだよ」

地図は悪魔が持っていた。悪魔は地図を差し出した。

「…そのとおりのようだ、鍵は…この世界の魔王を追いやることだったようだ」

「じゃあ、現世に戻れるのか！？…時間が気になるんだ」

「こっちに来て5日はたったか…現世では5時間ほどたっているはずだ」

ということ、大体現世では今、夜の直前といったところか…
「ともかく、戻るか、地図に手をかざして戻りたいと念じる」

「少し待つが良い」

オルデスト帝国の魔王だった。

魔王は黒いフードを被り、黒いマントをしていた。

「良くやってくれた、選ばれし者達」

「…どうも」

俺はこの魔王が何者かまったく知らなかった。

…警戒している、といつても過言ではない。

「…ここからの旅で、いつ役にたつかはわからんが、これを持っていくが良い」

そういつて、魔王はリングのようなものを投げしてきた。

「これは何のリングなんだ…？」

紫色の石が埋め込まれたリングだった。

「それは…！魔王様！いくらなんでもこのリングは…！！」

黒騎士が戸惑っていた。それほど危険なリングなのだろうか。

「…これは、幻覚を作り出すリングに似ているが…死の指輪デスリングではないな」

悪魔も知らないようだった。妹はただきよんとしていた。

「このリングは代々1000年間、前魔王…つまり我の父上から受けついたものだ」

とんでもない、そんなに貴重なリングをいただいているものなのか。

「そのリングは、地獄の指輪ヘルリングと呼ばれているものだ」

「魔王様…！！このリングははやすぎます…！！」

「案ずることはない、選ばれし者へ受け継がせることが我が使命だと思つたまでだ」

地獄の指輪…一体、どんな効果なのだろうか。

「そのリングの力は、死の指輪と似たようなものだ」

…それならこんなリングがある必要が無い、きつと何か他に理由が

あると考えた。

「相手の五感を狂わせることができる、もちろん幻術や幻聴も」

「なるほどな、リングが強すぎて自分まで狂うことがあるんだな？」

魔王は悪魔のほうを見た。察しが良いとでも言いたいのだろうか。

「…その通りだ、故に自身が傷つくこともある、とても危険だ」

何でそんなリングを渡すんだ！とでも言いたかった。

しかし喋り辛い雰囲気だった。

「己に飲まれるな、飲まれたら飲みかえせ、それを肝にめいじておけ」

「…リングの中には太古の大魔王の精神が宿っているというからな」

「その魔王に飲まれる可能性があるということか」

「まあ…貴様が居れば大丈夫だろう、カオス、選ばれし者を頼むぞ

…」

そうして、数十分の会話がすみ、俺達は現世に帰った。

自室だった。

時間は夕刻、五時過ぎ。

「では俺は一旦別世界へ戻る、しっかり身体を休めておけ」

そういつて悪魔はすぐに消えた。

「お兄、私疲れたから寝てくるね…また、夜にはなそ？」

そういつて、妹もすぐに自室へ戻っていったようだった。

俺は、現世へ帰ってきてもどうにも胸騒ぎが止まらなかった。

「…寝るか、とりあえず」

俺はすぐにベッドに寝ころんだ。

疲れているから、すぐに眠れるだろう。

俺は、すぐに胸騒ぎの答えを知ることになる。
すぐに後悔と絶望が訪れるとは考えてもいなかった。

第二十章 絶望へ

目を覚ますと、夜の9時だった。

ご飯も食べていないし、風呂にも入っていないかった。

「やべー…寝過ぎした」

ぼやきながら、リビングへ向かった。

そこでは、兄貴がTVを見ていた。

「あ、兄貴帰ってきてたのか」

「ん、何だ、遅い起床だな」

数年ぶりに顔を見た気がした。

それほど、ベネジスト大陸に長く居た気がしていた。

「…他の皆は？」

兄貴と自分以外に、人の気配を感じれなかった。

「父さんと母さんは仕事だ、凧は…寝てるんじゃないか？」

「何だ、そっか…飯は？あ、ひよっとして作ってない？」

「作れないと言った方が正しいな、…それよりどうした？その指輪」

兄貴は優秀だった。一部のやつは天才とまで呼んでいた。

しかし、料理だけはダメダメだった。

…そういえば、リングを外すのを忘れていた。

「…高そうな指輪だな、凄い輝きだ」

「うーん、まあ、不問ってことで…」

烈火の石を埋め込んだ石だけを右手人差指にはめていた。

地獄の指輪はポケットにしまっていた。^{ヘルリング}

「まあいいだろ、それより、凧を起こしてきてくれないか」

自分で起こせばいいのに、と思ったが、凧の様子も見なかった。

凧の部屋についた。

コンコン、とノックをした。

「おーい、凧ー起きてるか？」

…返事は無かった。
入るぞ、とドアを開けた。
案の定、寝ていた。

「ん…あ…どうしたの？」

「もう9時だぞ、とりあえずリビングにおりてこいー」

しばらくして、俺は風呂とリビングに戻ってきた。

「お兄ちゃん、なにか用なのー？」

「ん、ああ、そろそろ飯が食べたいんだ、いいか？」

カレーの余り…と気付いたが、もう無いようだった。

「うーん…炒飯ぐらいなら」

妹がそう言った時だった、外から鈍く重たい爆発音のようなものがきこえた。

「何だ!？」

TVの電源は切れ、あろうことか電気まで消えた。

暗闇の中、外を見ようと玄関へ急ぐ。

玄関の扉をあけると、向かいの家々が全焼していた。

「どういうことだ？」

兄貴も、妹も戸惑っているようだった。

「ここでもなかったか、次はここか」

確かに、そうきこえた。

上空から、長髪で、黒いコートをきた男がやってきた。

「…てめえ!…何者だ!？」

「む…そのリング、ここが正解だったか」

驚いた、まさか…うちが狙いできたのか、こいつは。

妹は、とっさにどこからかリングを取り出し、指にはめた。

「これはこれは…!獲物が大量だ!今日はなんてついているのだろ

うか！」

「それも…烈火の石に、深淵しんえんの石、死の指輪デスリング！」

リングが狙いなのだろうか、石を良く知っているようだった。

…別世界からの侵略者？それとも…？

「誰だ、あいつは、実は知り合いか？」

兄貴は冷静になったようだ、そう言った。

「む…？貴様は何だ、気を感じれん」

謎の男の指を見ると、烈火の石と良く似た色の石が埋め込まれたり
リングをはめていた。

「何だ？なぜ三人…貴様は選ばれし者か？」

「選ばれし者？お前は頭が大丈夫か？良い病院を紹介してやろうか
？」

煽るなよ…こいつからはききたいことがある。

そう言おうとしたが、兄貴には何も悟られなくなかった。

「貴様…！後悔するなよ、俺の狙いは選ばれし者達だけだ、消えろ
！」

そういつて、謎の男はリングに炎を灯し、地獄ヘルファイアの炎と言った。

「危ない！お兄ちゃん！」

妹はそういつて、バリアを張った。対応スピードは神業と言っても
良いほどだった。

「…！邪魔立てするなら容赦はいらないな、ここら一体を燃やすか
こいつは本当に何者なのか、何処から来たのか。

「何だ、あの炎…」

兄貴は初めて見たのだろう、驚いていた。
当然といえば当然だ。

「させねーよ、捕まえて何者か白状させてやる」

そういつて、俺はリングに炎を灯さず、イメージだけをした。
敵を捕まえられる物、鉄の鎖を。

すかさず投影し、相手を捕まえようとした。

「リングを通さないんじや脅威ではないぞ、燃やしつくさせてもら

う」

地獄の炎、全開だ！

ドゴオオオオオオオオオオ！と音をたて、周りが次々と焼かれていった。

妹も全力でバリアを広げているようだが、あまりのスピードに追いつけなかった。

「くっそ……！どうしたら……！」

そんな事を言っている間に、見渡す限りが火の海になった。

「てめえ……！戦いに他人を巻き込むじゃねえ！」

「黙れ！悪いと思うなら、とめれなかった貴様達もまた同罪だ！消えろ！」

「そこまでにしてもらおう」

あの悪魔だった。

「この世界を戦いに巻き込むとは……何のつもりだ」

「……悪魔神……カオスだったか、ククク、何のつもりだ？だと？」

「俺は、大魔王、サタン様のしもべ、コードネームN-08だ！」

大魔王サタン……？何者なのだろうか。

「……！！お前は……成程、何の真似かと思ったが……」

「故に、選ばれし者を消そうとしたのか」

……大魔王サタンのしもべ、N-08といったか。

そいつが俺達を狙うということは大魔王サタンというやつも……？
兄貴と妹はただ呆然としていた。

「その通りだ、しかし……！貴様がここに来るとは計算外だ、ひかせてもらおう」

「……覚えておけ、もうじき、大魔王様が現世を潰しにやってくる、ククク……！」

そう言つて、N-08は消えた。

「…くそっ！何なんだよ、大魔王サタンって…」
さえぎるように悪魔は言った。

「最後の世界に君臨する魔王だ、…最後の目標でもある」

「な…！！もうそんなやつに目をつつけられてんのかよ…！？」

「まずいな…今はかなう相手じゃない、現世は終わりか…」

悪魔が初めて弱気発言をした。

「何で…！？かなう見込みはないのかよ！？このままじゃ…！」

「不可能だ、7人の選ばれし者が集まらない限り…」

話している間にも炎はさらに燃え上っていた。

「…何なんだ？お前」

兄貴だった。

「何の話をしている、魔王だとか選ばれし者だとか」

「お前は…兄か、兄には何の力もないようだな」

といっても、悪魔の声は兄貴にはきこえていないようだった。

いや、目視すらできていないのか。

その時だった。

空が割れた、いや…別空間が現れた。

「…よう、選ばれし者達、それに悪魔神よ」

「…！！大魔王サタン！！」

胸騒ぎの答えを、知ることになる。

第二十一章 大魔王サタン

「あれが…大魔王サタン!？」

空間からは大魔王サタンがでてきた。

悪魔と大きさは同じぐらいか。

「ははは、ホログラムなんだけどな」

大魔王というほどの威圧感も何もなかった。

まるで、深い闇を見たような…無というのか。

「未だ力は戻っていないようだな…なぜ現世に…」

「一目見ておきたくてな、選ばれし者を、それに…」

「久々にお前を見たかったからな、1000年前は世話になった」

「…その程度のことなら帰れ、お互いにメリットはないだろう」

俺と妹は黙ってきいていた。

兄貴のほうを見ると、兄貴も黙って大魔王を見ていた。

「ははは、冷たいこと言うな、本当に用が無くくると思ったか？」

「わかってるかもしれないけど、現世を滅ぼそうと思ってな」

「させると思うか？」

「はつきり言って、邪魔すぎる、この世界は滅ぼさせてもらっ」

「…紹介しよう、俺の自慢の部下達だ」

大魔王サタンがそう言つと、別空間から

5人の人間がやってきた。

「!!!人間…」

「N人間とよばれる催眠により特殊強化を施した人間だ」

「この5人は別世界の魔王以上の力を持っているぞ、精々抵抗せず

…」

「世界が滅びる様を見てくれ、じゃあな」

そう言い残し、大魔王のホログラムは消えた。

「さて、殲滅を開始する、N-02 N-05、世界各地へ散らば

れ

リーダーなのだろうか、そいつがそう言った瞬間

N - 02 N - 05までのN人間は消えた。

「ほう…ここはお前一人で殲滅できると思っているのか」
悪魔はやる気満々のだろうか。

…冗談じゃない、別世界の魔王以上に強いなんて…

「愚問だな、俺一人で世界を殲滅することでも可能だ」

「これは、礼節だ、誇り高き選ばれし者と悪魔神への」
他の各地へ散った4人はどうするのか…

見逃すのだろうか…それとも他に戦えるやつが居るのか。

「…別世界の魔王より強い、か…徐々に運動ができそうだ」

「…ほう、今の発言、後悔するでないぞ…！」

新たな戦いが幕をあける…

第二十二章 悪魔の力

「幾ら貴様が悪魔神でも、俺にかなうことは無い！」

そう言つて、N人間ネオヒューマンはどこからか

リングを出し、右手人差指にはめた。

「…ほう、死デスリングの指輪か」

「実は俺は幻術師が嫌いだな…」

さえぎるようにN人間は言った。

「さつさと始めるぞ！」

そしてリングに黒い炎を灯した。

「…術師は殺したくなる」

悪魔はそう言つて左手をN人間にむけてかざした。

「何をしようとしているのかしらんが、俺に貴様の攻撃が届くことは無い！」

その時悪魔はかすかに微笑した。

「…悪いな、もう攻撃は届いている」

「！？何を言っている…！まだ何も」

N人間がそう言つた瞬間だった。

N人間の身体が何かに吹き飛ばされた。

「な…何だこれは…！」

「…俺を甘く見たな、俺の能力をきかされていないのか」

N人間は別世界の魔王より強いと言っていた。

…ハッターだったのだろうか、悪魔が圧倒的だった。

「能力だと…！」

N人間はリングから炎を噴出し、見えない何かから逃れたようだった。

「俺にもイメージを具現化する力がある、考えたらわかることだろう」

N人間は幻術で5人に分身した。

どれが本当のN人間か、リングの炎で少し調べようとしたが俺とN人間は距離があきすぎていて無理だった。何より、悪魔とN人間の戦いに手を出すことは俺にはまだまだはよいように感じた。

「中々の術師のようだな、5人の分身を容易くあやつっているようにうかがえる」

「N人間をなめるな…！」

5人のうち3人が悪魔に向かって突進していった。残りの2人は手を手を合わせ、何か黒い塊をつくっていた。

「片腕で十分だ、お前こそ俺をなめるな」

そう言つて悪魔も左手から黒い塊をつくった。

死を味わえ

悪魔がそう言った瞬間に

悪魔の左手から黒い光線のようなものがでて、とても禍々しいものだった。

「これ…は…！！うおおおおおおお！！」

N人間5人に直撃したようだった。

「すげえ…こんなに強かったのかよ…」

「当たり前だ、悪魔は人間とレベルが違いすぎる」

「…といつても、最後の力を振り絞って逃げたようだな」

「！？完全に直撃してただろ？」

「後ろの2人がつくついていた黒い塊を瞬時にあてて少し軌道をそらしたようだ」

…俺とは見解のレベルすら違った。

なんて遠い距離なんだろう。

「へえ、やっぱり強いな、これはもう俺が手を下そう」
大魔王サタンの声だった。

「！…力も戻っていない魔王に何ができる」

「そうかつかさんなよ、すぐ終わらせてやるからさ」

「…この程度の世界なら、容易く滅ぼせる」

大魔王サタンが黒い空間から出てきた。

…ホログラムではなかった、完全に本体だとすぐわかった。
とても禍々しい殺気、オーラが出ていた。

目を合わせていないのに、自分が狙われるような感覚。

一歩でも動くと殺されるような…そんな気がした。

「俺の力も3割は出せる、悪魔神といえどその力には逆らえない」

「…何をやる気だ」

「言っただろ？すぐ終わらせてやるって、この世界を滅ぼす」

「させると思うか？」

「邪魔できると思うか？」

悪魔が右手を構えた瞬間だった。

これから世界は闇へ向かうんだ

ダイクインフェルノ
闇地獄

世界を闇が包むかのように
完全に真っ暗になった。

「くそっ…！全力でリングからバリアを張れ！！」

「！！！！」

世界は滅亡へむかう。

第二十三章 滅亡へ

「くそっ…！何だよこの暗闇…！？」

リングの炎を展開しつつ、周りを見ようとした。

「防御をおこたるな…死ぬぞ」

「あれ…？お兄ちゃんが居なくなってる！」

「…見捨てる、自分の命だけを護れ」

「てめえ！家族を捨てれるわけねーだろ！」

「いずれにせよこのままだと世界は滅ぶ！」

…消えるのだろうか、この世界が。

「見苦しいな、死を恐怖するとは」

「…てめえ…！何なんだよこの闇！」

「この世界が地獄に変わる様を見るが良い…！」

また会おう、選ばれし者達、そして悪魔神よ。

状況はよくわからなかった。

ただ、地におちる感覚がした。

「全力でバリアを張れ！気を抜くな、死ぬぞ！」

体力的にも精神的にも限界が近かった。

「どうなってんだ…これっ！」

ガラガラガラと音をたて、ガラスのように空と大地がはがれた。

「くそっ…！このままじゃ…！」

「…新たな大陸へ逃げるぞ！地図を渡す！」

衝撃的な一言だった。

「いつまでおちるんだよ！こんな中じゃ無理だ！」

「受け取れ！」

悪魔はそう言って、妹に地図を渡した。

「お兄！バリアを解いて！私がするから…！」
俺はバリアを解いた。

その瞬間に妹のバリアが俺を包んだ。

「…いこ！新しい大陸！」

「うおおおおおおお！」

意識が一瞬とんだ気がした。

目をあけると、草原の上に居た。

第二十四章 ユーノス・レディル街

「どこだ、ここ？…予想外に平和そうな場所だな」

「…現世どうなったんだろ？」

妹はただただ不安だったようだ。

「…今は、大丈夫と思うしかない」

あの時、空間が滅びる感覚がわかった。

おそらく、宇宙の中から地球という惑星が

跡形もなく消えたのだろう。

理解したくはなかったけど…

「ここは俺も知らんな」

「…！悪魔、何であの時逃げ…」

さえぎるように言った。

「あのままだと空間ごと俺達が滅びていた」

現世が滅んだ、そう言っているのと同じだった。

「…そんな…家族も…友達も…みんな…？」

「今は無駄な事を考えるな、あれを見る」

悪魔が指をさしたところを見てみると、遠くの方に

かすかに街のようなものが見えた。

「とりあえずいこうよ、ここがどんな場所か知るためにも…？」

「……わかった、あそこに向かっていこう」

数時間ほど歩くと、確実に街が見えた。

「スゲー…意外とでかい！」

「綺麗な場所だなーここ…」

「ここまで平和そうな世界は見たことがない、おそらく何か影があるな」

「そこまで深く考えなくても…街にいたら一休みしよう」

そして、街についた。

沢山の行商人や、子供が居た。

綺麗な土地とは裏腹に、子供たちは貧しそうだった。

「…あ、あの、すみません、ここってなんていう街なんですか？」

「ん？ここはユーノス・レディル街だよ」

「ここを知らないとは変わってるな」嬢ちゃん

そう言つて、行商人は歩いていった。

「…とりあえず、宿か何か探そうか」

「……」

悪魔はずっと無言だった。

というか、この街は悪魔が歩いていても何も思わないのか。

その時だった。

「止まれ！！その貴様、何者だ！」

一人の…兵士だろうか、鎧をまとった男が悪魔に槍をつきつけた。

「通りすがりの悪魔だが、いきなり槍を向けるとは物騒だな」

「通りすがりの悪魔：！？ふざけているのか！」

やっぱり悪魔は特殊だったようだ。

兵士以外は気にしていなかったようだ。

「何だ？この街は…城も何も無いようだ、何故兵士が居る」

「当たり前だろう！街を護るのが警察のつとめ！」

…これが警察か、と思った。

確実に妹も思っていたのだろう、表情は何か衝撃的なものを見たようだった。

「警察…？警察がそこまで武装とは、あいにく俺はこの街に初めてくる、悪さを犯すつもりはない」

「口では何でも言える！貴様…どこから来た！」

「遠い世界からだ、先を急ぎたい、邪魔をするな」

「ふざけた事を…！署まで」

「

ドスツ！と鈍い音がたつた。

悪魔が気絶させたようだ。

「面倒だ、こういう輩には眠っていてもらうのが一番だ」

「ははは…」

苦笑いが止まらなかつた。

「あ、あれ宿じゃない？」

「ん、おお！休んでいこう！」

「…この世界の通貨を知らん」

それは言っちゃダメだよ…

そう思いながら、ため息をついた。

「そろそろ暗くなってきたな、野宿する場所を探すぞ」
仕方が無かつた。

「は…結局何なんだよこの大陸…」

それから歩いてても歩いてても、同じ場所に戻ってきた。

「んー？…何だ、さっきからループしてる気が…」

「おかしいねー、まっすぐ歩いてるのに？」

「…平和そうだからと油断していたな、まんまと幻術にかかってい
たようだ」

「え…！？誰が…？」

「相当なレベルの術師だ、油断していたとはいえ、ここまで惑わす
とは」

「ごめいとうですね、貴方達にはここで消えてもらいます」

「…！！…誰だ！？」

振り向くと、長髪で、冷酷な眼をした人間が居た。

「名乗る程の者ではありませんよ」

そう言つて、リングから紫色の炎を出していた。

「…あのリングは…まさかな」

「やるっていうのかよ…こんな街中で！」

新たな戦いが幕をあける。

第二十五章 術師

「まずは腕試しといきましょうか…」

術師はそう言つて、幻術で槍をつくつた。

「くそつ！とりあえず街から離れよう！」

「それは無理だ、相手は相当の術師だからな」

術師は俺のほうに向かつて走り出していた。

「術師だから！？関係ねえって！この街が壊れたら…！」

「幻術で街を構築されてみる、出るのに何時間かかるかわからん」

そう言つて、悪魔は天叢雲剣あまのむらぐせになつた。

「仕方ねえ…！」

俺は天叢雲剣をとり、術師を迎え撃とうとした。

「面白い能力だ、幻術ではないですね…変化できるとは」

「風、少し下がってる！」

天叢雲剣に炎を纏わせた。

紅色の炎が輝かしく光をはなっていた。

相手の槍には、紫色の炎が纏われていた。

「うらっ…！」

術師が槍でついてきたので、少し右にかわして剣を振りかざした。

「なかなかいい動きができるじゃないですか…クク」

術師は槍の先端で剣を横から薙ぎ払い、俺を槍で何度もさそうとしてきた。

「くそつ…幻術使いでここまで戦えるのかよ…！」

かわすのがギリギリ、劣勢だった。

「…このままじゃちがあきませんね…本来の戦い方をさせてもらいますよ」

術師はそう言つて、半歩後ろに下がリングに炎を込めていた。

(…まずいな、幻術を使われる前にやれ)

わかってるっての、と言いたかったが

一も二もなく斬りかかった。

俺の剣は見事に術師を頭上から斬った。

(…！リングの炎をあたりにまき散らせ！)

「残念…もはや貴方は幻術の中…霧の中で惑うだけ」

俺の周りには霧しかみえなかった。

3m先も見えなかった。

「趣味悪い…！！」

(リングの炎で相手の位置を探りながら動け、焦ると勝機は無い)

「おそらくリングの炎で探知しようとしているのでしょうが…」

「無駄です！私の分身は10体を超えますから…クク」

(…まずいな、今の言葉が本当なら既に勝機は無い)

10体なんてありえるのか、脳でそこまで処理できるのか。

このままでは本当に勝ち目が無い。

「安心して下さい、痛みを与える暇もなく…」

「そろそろまざっていい？」

妹の声でした。

…今思うと、俺と悪魔には確かに幻術がかかった。

しかし後ろに下がっていた妹にはおそらく幻術はかかっていなかった。

「な…女を相手にするのは趣味じゃないのですが…」

「大丈夫だよー、どんな幻術かけてるかわからないけど…」

「幻術を消させてもらっただけだよ？」

そう言うと、何か音がきこえた。

「…！何だこのツタは…！？くそ…！！」

「きっとそのリングを外せば、幻術を使えなくなるでしょ？」

(過去に戦闘についての知識を覚えておいてよかったようだ)

カラカラン、その音になると、幻術の霧がなくなった。

その時に悪魔は言った。

「…そのリング、やはりお前は…」

「！！…私を知っているのですか…」

「まさかこのような無駄な戦闘で会えるとはな話が見えなかった。」

戦いは終わりなのだろうか、悪魔が天叢雲剣から戻った。

「あいにく、私には悪魔の知り合い等居ないのですが…クク」

「お前、そのリングは誰から受け継いだ？」

「…なぜ受け継いだことを…！」

「これは…代々我が家に伝わる、死の指輪デスリング」

「かつて、地獄から持ち帰った伝説のリングをきいています…悪魔と術師の会話をきいても何一つ意味がわからなかった。」

しかし、妹は何か気付いたようだった。目が笑っている。

「…お前が、選ばれし者だな、名前は何という？」

これはたまげた。

さっきからの会話が繋がったような気がした。

驚きすぎて声が出なかった。

「選ばれし者…？クク、知りませんね、それに名乗るつもりもない…！」

そう言っただけ術師はリングをとろうとした。

しかし、悪魔がリングを先に奪い取った。

「名乗れば返す、俺はお前の名が知りたいだけだ」

「…！悪魔は噂通り汚いようだ…クク」

「…ですが、私には名前が無いのです、答えようもない」

「知っている、しかし代々…デーモンという名前を受け継いでるだろっ？」

デーモン…？悪魔の名前だと思った。

「よく御存知で…つけられた異名のようなものでしょうか」

「お前、俺達と一緒にこい、お前は選ばれし者だ」

「断ります、まったく意味が解らないですから」

「…俺はずっと術師が嫌いだ、嘘しか吹かんように思えるからな………？」

「何故俺達を襲った？力量をはかるのが目的なんだろう？…これから旅を共にする仲間の」

「選ばれし者だと教えられてきたのだろう、おそらく代々…」

「…何を隠しきろうとも無駄なようですね、その通り…です」

「ちょっと待ってよ」

妹だった。ずっと静かにきいていたのに。

「この人は私達を殺すつもりでいたんでしょ？」

「…死んだら死んだで、その程度の者だったということですよ」

「てめえ…人情がないのかよ…」

「選ばれし者の使命はそれほど重たいものなのです」

「決まりだ、旅を共にしてもらおう」

嫌だったが、仕方がなかった。

…使命のためなんだと割り切った。

悪魔は術師…デーモンにリングを返した。

「ではこれから宜しくお願いします」

術師はそう言って笑ってみせた。

「っちえ…とりあえず疲れたから野宿する場所を…」

「…わかった、よろしくね」

「もうすぐ森があります、生物はいないので安全です、そこで野宿しましょう」

「さっさと歩くぞ、もうほとんど暗闇になるころだ」

新たな選ばれし者、デーモンを仲間にし

また冒険が始まる。

第二十六章 野宿

「ここが森か：本当に人気も何も無いな」
しばらく歩くと森についた。

意外とすぐついた気がしたが、もう深夜とあっていいほど暗かった。

「わざわざ街があるのに、ここに来る人は滅多にいませんからね」

「丁度良いことだ、野宿といくぞ、まずは火をおこすか」

「うわー本格的だねー：んじゃ、木拾ってくるね」

「私もいきましよう、念のために：男もいたほうがいいかもしれませんからね」

いきなり襲いかかってきた術師何かを妹と2人でいかせたくはなかった。

しかし、悪魔が俺に目配りをしてきていた。

妹とデーモンは、森の中へ入っていった。

「：大丈夫なのかよ？わざわざ2人でいかせて」

「問題無い、お前の妹はなかなか防衛術にたけている」

「仮にデーモンが襲おうとしても：逃げることぐらいはできるだろう、それに…」

「：それに？」

「：……代々、選ばれし者7人のうち1人は術師なんだが…」

「女に手を出すようなやつは、今までにいなかったからな」

説得力があるようなないような、だった。

しばらく待つぐらいはアリか、と思えたから十分説得力があったのか。

「：結局、この大陸は何なんだろう、誰かに支配されている感じもないけど」

「デーモンが戻ってくればきけばいい」

その時、妹と術師が帰ってきた。

「これぐらいで足りるかな？」

結構な量をかかえていた。

「問題無いだろう、火をおこすぞ」

しばらくして、火がおこった。

リングの炎を使えばよかった。と思ったが、何でもかんでも

リングに頼ってはいけないし、自分の力を無駄に使うのはやめよう
と思った。

「ご飯は、また後日ということでもいいでしょう」

「…そうだ、この大陸って結局何なんだ？」

「私の故郷、インテ・ガーデン大陸です」

「………何？…おかしいな」

悪魔が何かひつかかったようだった。

「何がですか？貴方も知っているのでは…？」

「………インテ・ガーデン大陸といえば、1000年前は焼け野原だった」

「…ええ、ここ数年で急に復興したのです」

「ここ数年でこんなに！？何なんだよここ、平和…だよな？」

「これはある術師が、幻術を使って復興した大陸なんです」

「…私の親です、幻を紛れもない現実に変えた」

「………ここまでとはな、よほどの術師だな」

「ええ、しかし、寿命だったのか…死にましたがね」

妹はずっと黙ってきているなと思えば、既に寝ていた。

「…そろそろ疲れているでしょう、後でいくらでもはなしますので

…今日はこのへんで」

「ああ、お前達は寝ろ」

「？悪魔は寝ない…？とか？」

「悪魔が眠りにつくとき、それは死ぬときだけだ」

驚いた。悪魔は睡眠をしない。

疲れをどうやってとるのかと思ったが、疲れていたので寝ようと思
った。

「…では、良き夜を……」
術師も、俺もそこで寝た。

…正式に言つと、俺は意識はあつた。

それから数十分しても、なかなか寝れなかつた。
悪魔はずつと、あぐらをかいていた。

気付くと、朝だつた。

太陽の光が差し込んでいた。

…そこで思った。

太陽はあらゆる世界に1個あるのか？と。

「ふわあああ……」

のびをすると、背骨がポキポキとなった。

「お兄、起きるの遅い……」

「そこまで疲れていたのですか」

「とんだ迷惑だ」

……一体今何時なのか。

「俺何時間寝てた……？」

「あの、今はお昼ですよ」

「…あ、腹減つた」

「もー！お兄つたら」

「街へいくぞ、金は幻術で作ればいいだろう」
最悪な行為だが、驚けなかつた。

また、街へ逆戻り。

これからどんな事が待ち受けているのか。
そんなことはわからない。

ただ、現世の無事を祈り。

ただ、家族の無事を祈り。

ただ、友人の無事を祈り。

そうして、今日も歩く。

第二十七章 北へ

「結局、キーは何なんだよー…あー腹減った」
街にむかって歩いてた。

お腹がすきすぎて、ぼやくことと歩くことだけしかできなかった。

「鍵となる部分、私にも予想はできませんね」

「この大陸は今平和なほうですし、支配者がいるわけでもありませんから」

結局この術師は選ばれし者なだけであって、何か答えを知っているわけでもない。

「おそらく昔のことと何か関係があるのだろう」

「…そういえば！この地図はともかく、誰がキーなんていう面倒なことを…」

さえぎるように悪魔は言った。

「神だ、神が与えし試練といってもいい」

「…腹減った」

神とは結局何なのか、とりあえず腹ごしらえが先か。

「そろそろ街につきます、お金を準備しましょう」

「…幻術でつくるって言うてたっけ？」

「その通りです、少しのお金ぐらいなら、実体化させるのはたやすいです」

便利なものだ。でもこれは現世じゃ使つてはいけない魔法っていうか…

術師は見事にこの世界の通貨をつくってみせた。

「…ここまでリアルとはな、俺でも幻覚と見破れんが」

「このリングはそれほど強力なものようです」

しばらくして、街へついた。

「飯屋どっ〜…」

「あそこの店に入りましょう」

読めない文字の店だった。

腹が減っていたので気にせずに入った。

「……4名様ですね、こちらの席へどうぞ」

店員は、悪魔を見て少し困っていたが。

なぜかすんなり通してくれた感じでもあった。

「…その姿じゃある意味不便だな」

「現世以外ならほとんどの世界で悪魔が存在する、大丈夫だ」

…現世以外のほとんどってことは、現世はよほど珍しいのか。

飯を食べ終わった俺達は、外に出た。

「さて、これからどうしましょうか…」

「キー探ししないといけないんじゃないかな…?」

「その通りだ、大体キーの予想はついた」

「え!? なになに!」

「……1000年前のこの大陸でのキーを思い出してな」

「1000年前のキーは、支配者である魔王を退けることだった」

「……だからなに?」

察しが悪いといった目で皆が見てきた。

「その魔王は退けたということですね? しかしまだ生きている…と
か?」

「その通りだ、おそらく生きている、この大陸のどこかで…探して
みる価値はあるだろう」

「え! 1000年もこの大陸にいて、んで…復旧してきたのに、ま
だ支配されてないってことは…」

「…お前の言いたいことは、この大陸にはもういない可能性が高い
ということだろう」

「しかし、それ以外に何も思いつかない、とりあえず探してからだ」
…冗談じゃなかった。

魔王を倒すことがキーだとしよう、これほど面倒なことはない。

「この大陸は広い、どこにいるか…そんなことの予想はまだつかない」

「つまり情報収集ですね」

「その通りだ」

…さつきから術師ばかりが答えてる気がした。

俺の察しが悪すぎるのだろうか。

「では、その魔王の容姿…昔のでもいいです、わかりますか？」

「…わかるが、何が目的だ？紙に描いて探すことはさすがに無理だぞ」

「念写ねんしゃします」

「え…ネンシャ？無理だろ！そんなんで位置わかったら…」

しばらくして呆気なくできたのであった。

「……………」

「位置はこれでわかるのか？」

「ええ、まかせてください…とりあえず北ですね」

「北へ10kmほどです！近いですね…クク」

近くない、こいつは10kmを何だと思っている。

そう言おうとしたときに妹は言った。

「飛んでいったらすぐだね」

…まさにその通りだった。

「行くぞ、この大陸でちまちまするわけにもいかないからなおそらく悪魔も現世が少し気になっているのだろう。」

リングに炎を灯し、翼をつくった。

「よし！前よりうまくなってる」

…言った途端にしらけた。

「で、では北へ飛びましょう、私についてきて下さい」

北へ、北へ、魔王を探し出すために飛ぶのであった。

第二十八章 古代遺跡

しばらく飛んで、街から10kmほど離れたところについた。辺りを見回しても、何もなかった。

「…おい、もしかしてためー嘘ついたんじゃ……」

「おかしいですね…確かにこの周辺のはずなんです」

「この辺りが幻術で覆われてるんじゃないかな?…多分幻術とはまったく思えなかった。」

しかし、炎を辺りにまき散らした。

「…おや、そのようですね」

「見事な幻術だ、身をひそめるためにここまでするとはな。本当に1000年間も…とまだ思っていた。」

「…入口のようですね、ここが」

術師は手をかざした、何かに触れているように見えた。

「遺跡か…何か、とてつもなく大きいな」

「入ってみよう?」

中に入った俺達は、まず辺りを見回した。

「スゲー…迷路みたいだ、広いな」

「何かの古代遺跡のようですね…1000年以上前からありましたか?」

「こんな場所は知らんな、しかし確かに古代遺跡のようだ」

「知らない文字ばかりかかかっているな…とりあえず進むぞ。畏じゃないよな?とおそろおそろ進んでいった。」

するとすぐに別れ道になっていた。

「…おいおい、本当に迷路だったりしない?」

「……ここに書いてある文字は日本語じゃないですか?」

「…古代遺跡に日本語とはな、少し驚いた」

迷路の別れ道に書かれていた文字は、俺には読めなかった。

「…あの、難しすぎて読めない漢字がところどころ……」
呆れた、という顔で見られた。
…少し慣れてしまった自分が悔しい。
皆のはなしによると、こう書かれていた。

愚かな冒険者達よ

我は魔王の使いなり

汝らが我に挑むにふさわしいか

これから試練を与える

道を間違えれば死

正しい道を進めば我の処へ辿り着く

ここで問題だ

「パンはパンでも食べられないパンは何だ？」

右〃フライパン、左〃黒糖パン

「あの…完全に侮辱されてる気がするんだ」

「パンはパンでも食べられないパン…ですか」

「簡単な試練だね…」

「…俺は両方食べれないけどな」

またまた呆れた目線がきた。

「面倒だ、右へ進むぞ」

右へしばらく進むと、また別れ道だった。

「面倒くせー！何なんだよこれ…」

次はこう書かれていた。

正解おめでとう

次の問題だ

「この中で我の特技は？」
右「早食い、左」お笑い

「これは完全にお笑いだ、俺にはわかる」

「センスの無い笑いですがね…」

「なんか悲しい人だな…」

「左へ行くぞ」

しばらくそういったことが続いて、最後の道は一本だけになっていった。

その道を進むと、大きい広場にでてきた。

「ここはまた凄い広いな…奥が見えねーや」

その時、かすかに音がきこえた。

「…誰ですか？その影に…」

さえぎるように何者かは言った。

「おほほほほ！おめでとう冒険者たち！」

「我に挑む権利を貰えたのだ、嬉しく思いたまえ！」

…冷たい目線を送ることしかできなかつた。

ピエロみたいな格好に、ふざけた顔つき。

「…お前誰？」

「我は魔王の使い！おほほほほ！」

「いや、魔王に用があるんだ、帰ってくれないか…」

「む…？魔王にようとは何だ！」

「いやいや、いいからいいから早く魔王呼んできてくれないか」

「我が魔王だが何か！？」

…その時一番空気が凍りついた。

「…おいお前、名前は何という」

「我の名は、魔王まさお！」

…こいつは空気が読めないだけじゃない
そうとうのつわものだ。

「…魔王まさお…あなたか…」

「ん？いや、お前知ってるのか？」

術師が知っているようだった。

そこで悪魔が答えた。

「…俺達が探し求めた魔王はこいつのようだ」

「1000年前とは似てもつかんな」

目ん玉が飛びでんばかりの驚きだった。

「こんな寒いやつが…1000年前にこの大陸を支配していた魔王
？」

「我を知っているのか！何者だお前達は！」

「…お前、記憶が無いのか？俺のことを1000年で忘れるとは思
えん」

いやいや1000年たったら忘れれると思った。

それより、まさおって…魔王まさお？本当に何だ。

「おほほほ！いかにも…！数百年前、我は記憶を無くした！」

「…いや違う！大魔王サタンの使いに抜き取られた！」

これもまた驚きだった。

「どういうことだ？…お前は魔王の使いといったな、その魔王は誰
だ」

「それこそが大魔王サタン！…憎いが、我の恩人！」

よくわからなかった。

しかし、こいつを倒さなければいけないと思った。

大魔王サタンの使いなら、ほうっておくわけにもいかない。

「…そうか、どうやらこいつが鍵となるようだ」

「倒すのですか？…どうにも気がひけますが」

「俺の記憶では…かなりのつわものだったが、今はどうだかな」
術師も俺も妹も、少し気がひけるような気もしたが
仕方ないという気持ちと、倒さなければという気持ちが強かった。

「我と戦うというのか！そつえばそれが目的できたようだな！」
「いいだろう！おほほほほ、相手をしよう！」

こんなふざけた魔王はすぐ終わらせて
現世に戻りたい、どうなっているのか…

「とつとと終わらせるぜ！」

魔王まさおとの戦いが始まる。

第二十九章 油断禁物

「悪魔、天叢雲劍あまのむらぐせに！」

「…いや、こいつ相手に剣は相性が悪い」
「どういう意味なのかきく前に、相手が襲ってきた。」

「おほほほほ！隙あり！」

相手は拳に炎を纏い、殴りかかってきた。

「しまっ…！」

ギンツ！と高い音が鳴り響いた。

反射的に目を閉じていた俺は、目をあけた。
すると術師が槍に炎を纏い、拳を防いでいた。

「お前…」

「戦い中に目をそらしてはいけませんよ！」

「邪魔をするな！」

魔王は拳で次々と術師を攻撃していった。

槍には少しづつヒビが入っていった。

「くっ…！」

とうとう槍が折れた。

「これでお前はお終いだ」

術師は魔王に左頬を殴られて吹きとんでいった。

しかし、妹のバリアのおかげで少し衝撃がマシになったようだった。

「拳相手では…速さが段違いのようですね」

「拳には拳が一番だろう」

悪魔が俺を呼び寄せた。

「何だよ！俺は素手でなんてゴメンだって…！」

「案ずるな、俺が拳になる」

まだ、その時は理解できていなかった。

「ほらほら！油断するんじゃない！」

魔王はまたもや殴りかかってきた。

「悪魔！何か武器、武器！」

すると悪魔は手袋サイズのグローブに変身した。

「え…？…何コレ」

「俺を手に装着して炎を纏わせて戦え！」

魔王はもうすぐそこまでできていた。

「お終いだ！！おほほほ！！」

ドーン！と爆発音があった。

「…何だ？」

俺は本能的に相手の攻撃を受け止めていた。

（今が隙だ！叩きこめ！）

「いい加減っ…邪魔なんだよ！」

俺の右手に少し痛みがはしった。

俺は、拳に炎を纏わせ相手を殴りとばしていた。

「見事です！」

「お兄、後ろ！」

なんとなく、後ろから殴りかかってくるとわかった。

俺はすかさずしゃがみこみ、殴りをかわされた反動で少し前へいく

魔王の腹に

左手で一撃をくらわした。

「ガハッ…！」

（いいぞ、もう一発いけ）

相変わらず悪魔は鬼だ。

しかし妥協する暇もない。

「じゃあな！」

ドーン！と衝撃が鳴り響く。

手ごたえはあった。

煙が邪魔で、何も見えなかった。

(気をぬくな、まだ終わっていない可能性もある)

「…やりましたか？」

「わかんねえ…煙が邪魔で何も……」

その時、俺は腹に背中に激痛を感じた。

気付くと吹っ飛んでいた。

「くそっ……！」

口から血が漏れた。

初めて…だった。

「お兄！」

「おほほほ！！油断してはいけないと言ったでしょう！」

吹きとんだ俺は、何とか着地し、声がきこえた方向を見た。すると、10mはあるんじゃないかという巨人がいた。

「な…なんだよ…こいつ変身できたのか…！？」

「ありえない大きさです…！これは……」

(…忘れていた、こいつは巨大化ができるんだった)

忘れてた…そんな言葉ですまされる問題じゃない。

おかげで背骨がいかれたんじゃないかと思った。

「久々に！楽しめそうです！おほほほほ！」

(…！いかん！元に戻る！)

悪魔はグローブから通常の状態に戻った。

「今度こそ本当のお終いだ！」

魔王は口に炎を溜めこんでいた。

「…あれは！何か撃つようですね…！」

「何かなんてレベルじゃない、あれを相殺する…バリアを張っている！」

悪魔は右手にとてつもなく邪悪な波動を溜めていた。

なんて禍々しい波動だ、もちろん魔王のほうも…

「はあああああっ…！」

第三十章 本体を探せ

「うおおおおおおお」

ずっと爆風により吹き飛んでいた俺は

本能的に炎で身体を護っていた。

「…セーフ？」

勝負はどうなったのかわからないが

微かに大きい影が見えた。

あれが魔王だと確信して近づいていった。

「痛いですね…まったく」

術師だった。

「何だ…お前無事だったのかよ」

「何ですか、そのげげんな顔は…」

妹はきつと、防御能力に優れているが故にバリアを張れただろう。

気遣いは無用と感じ、そのことについては触れなかった。

俺と術師のほうに悪魔がきた。

「…おい！何であんな大きな技使ってたんだよ！」

「手荒だが、アレを止めるには仕方がなかった」

「…それで、魔王はどうになりました？大きな影は動いていませんが

…」

「…俺にもわからん、こういうときはこっちから仕掛けるに限る」

そう言うと、悪魔は左手に黒い塊の炎をつくりだしていた。

ネオヒューマン
N人間を倒す時に使った技だろう。

これは御愁傷様…

「やつは強い、この程度で終わるかわからない、気を抜くなよ」

悪魔は黒い塊をレーザーのようにとばした。

その風圧でまた吹き飛びそうになったが、何とかこらえた。

ドーン！！

高い爆音が鳴り響く。

「完全命中だ…さて、どうなる」

ゴクリと生唾を飲んでしまう。

あれをくらって生きているなんて尋常じゃない。

「おほほほほほほほおおお！痛いじゃないか！！出て来い！！！」

魔王がとても高い声で叫び出した。

「…大した生命力だ、参るな…」

「尋常じゃないですね、あれをどう倒せば…」

「少し全力でいくしかないが、この身体ではどうにも力がでんあれで力が出ない？冗談じゃない。

というか魔王の生命力は底なしか…未だに叫び続けていた。

妹がそろそろ心配になってきた。

「…その身体が本体ではないのですか？」

「俺の本体は自身でもどこにあるかわからない、これは分身のようなものだ」

「…1000年前、残った微かな魔力でつくりだした分身だ」

その言葉で、1000年前の戦いがいかに壮絶だったかを感じた。

…悪魔が魔力をほとんど無くすほどとは、今では考えられなかった。

「…あれをくらって生きているとは考えられないんだがな」

「もしかすると、あれが本体ではないのでは？」

「どういうことだよ？確実に実体があるし、ダメージもおってるんじゃない…」

「十分考えられるな、幻術ではないが…あやつり人形にしか見えん煙がはれてきて、魔王の姿が完全に見えた。

「…見る、肩の負傷具合、腹のえぐれ…あれで動けるとは思えんすさまじい程の傷が魔王にはついてた。

「…わかりました！あれは何者が裏からあやつっているのではありません！」

「何かの術ということは確かですが、どこかに本体があるのは確かです」

「おそらく本体から魔力を持続的に送りこんで扱っているのではしょう」

「…それなら合点がいくな」

「ほぼ不死の肉体、それに姿が変わりすぎている…」

「なら、本体を探せばいいのか。」

「そう思っただけを見回すが、当然いなかった。」

「よくもこの…！魔王をなめるな…！」

魔王はまた口に炎を溜めこんでいた。

「…まずいですね、本体を探しつつ逃げますか」

「…そうだな、極力相殺するのは避けたいことだ」

「相手の魔力が尽きるのを待つのも一興だが、本体を叩くほうが楽だ」

「よし、じゃ本体探しってことで…！俺は怖いから逃げる！」

レーザーにあたってたまるか。

そう思っただけに走りだした。

しかし俺は本体探しよりも、妹探しがメインだった。

「死ねよ…！」

レーザーが放たれたようだ。

音でわかる、風を切って進んでいる。

少し振り向くと、確実に俺に命中するコースだった。

「…あれ？ひよっとしてやばい？…」

「自分で相殺しろ、お前は力の温存を考えなくていい…！…このことです！」

術師が大声で叫んできた、冗談じゃない！

「だから戦いつて嫌いなんだよ…どこまで弾けるか」

俺は8割ほどの力をリングに送り込んだ。

それぐらいはしないと確実に死ぬからだ。

レーザーが高速で向かってくる。

もう後1秒でつくだろう。

「なるようになれって!!」

全力で炎の壁をつくった。

ドオオオオオオオ!!

と音がしていたが、炎の壁は持ちこたえていた。

しかし、後何秒持つかというところだった。

残った力で炎の翼をつくり、上空へ飛んだ。

「ここなら…さて、本体はどこだろ」

本体探しゲーム、といえは聞こえはいいだろう。

これから、本体探しが始まる。

第三十一章 謎だらけ

そろそろ自分でもスタミナが切れてきたのがわかる。
息切れ？そんなんじゃない、手足が痺れてきた。

「くそっ…本体どこだよ…」

そうばやきつつも、妹探しをしていた。

まさか爆風で…そんなことは考えたくない。

「本体に気付いたようだな！おほほ！無駄！！」

魔王は疲れをしないようだ。

どんどんと殴りかかってきたり、ビームうってきたり。

おまけに満面の笑みだった。

術師と悪魔に本体探しは任せて、俺は敵をひきつける。

そんなつもりはなかったが、自然とそうなっている感じだった。

「くそっ…イメージする暇もねえ…ずりいぞてめえ！」

「戦いとは卑劣なものだよ！おほほほほ！」

相手の殴りの風圧だけで吹き飛びそうだった。

そろそろ飛んでいるのも限界か。

そう思つて、下へ少しずつ降りつつ避けていた。

「あー！本体早く見つけるって！！」

全力で叫んだ、俺がもたなかったからだ。

「何とかしてヒントを貰って下さい！」

「無理だろおおおおおおおおお！！」

避けて避けての繰り返しが終わわり、とうとう地面に着地した。

「潔く死ぬことを覚える！おほほほほ！」

さつきから毒舌になってきてるなこいつ。

「本体どこか教えるよ！あ、まさかやられるのが怖いチキン野郎な

のか！？」

「おほほほほ！面白い！ならヒントを差し上げましょう！」

あやつるには標的と近い距離でないといけない。
でないと信号が途切れ、あやつれなくなる。

確かに魔王はそう言った。

「近い距離…この辺に隠れる場所なんて…！」

「さあ！5、4、3、2、1、0！死になさい！」

俺は思いつきり殴り飛ばされた。

ギリギリ少しの炎で防げたはいいが、骨が数か所イカれただろう。
術師が何とか受け止めてくれた。

「ヒント貰ったぜ…へへ」

苦笑いしても痛みは消えない。

…このままだと死ぬ気がした。

「大丈夫ですか！…く、あやつる標的と近い距離…！」

「簡単な答えだろう」

悪魔の声がした。

もう景色がボヤけていた。

「本体はあの魔王の中に居るとしか考えられん」

もしヒントが本当なら、確かにその通りかもしれない。

「……こんなところでくたばってる場合じゃねえな…」

そうわかっていた、しかし身体が限界だった。

「おほほほほ！まとめてくたばれ！」

魔王がまた口に何か溜めているのか。

感覚が研ぎ澄まされているのか、これは何の境地状態だろう。

…見えないはずなのに、見える気がした。

「まずいな…こうなれば本体ごと破壊する」

「…！待って下さい！ここで大技を使うのはもう危険です！」

「ここは私の幻術の力に任せて下さい…！」

…俺は休んでいても大丈夫なのか。

とりあえず傷を回復しなければ…しかし妹はいない。

悪魔は術師が回復術を使えるとも思わない。

…血を流しているせいか、冷静に物事を考えた。

「かなりの力を使えますが…魔王の身体を別次元にとばします!」

「…そんなこと…できるのかよ?」

「あの大きさだと…かなり負担がかかりますが、仕方ありません
そう言つと、術師は眼から炎を出していた。

眼には何かの術式がかけられているようだった。

微かにしか見えないから、あまりわからなかった。

「潰れる!」

魔王がレーザーを放つたようだ。

「何とか本体だけを残します…!」

つくよみ
月読

魔王のレーザーと身体が、異次元に転送されるかのように
歪んでいるのが少し見えた。

「…若くしてその技を使えるとはな」

悪魔は冷静に見つめていた。

「何だ!!これは!!…ぬ…!!」

「うおおおおおおああああ!!」

魔王の身体が別次元にとんでいったようだ。

術師はとばした瞬間、倒れこみだした。

「…やはりあれだけの大きさの者を動かすのはリスクが高いようだ
な」

「…3日休めばきつと治ります、今は動くのも困難ですが…くく
…」

すると、微かに声がきこえた。

「まさか本体を出すことになるとはな…驚いた」

…魔王の声とは少し違っていた。
しかし魔王としか考えられない発言だった。

「…何者だ……！」

悪魔が驚いているのがわかった。

「影からあやつるだけじゃ倒せないか、流石に強いな」

さっきの魔王とは違うようだ。

本体…といっても分身体とは違う、あやつられていただけ…

「何者だときいている、名乗れ……！」

「お前は俺の事を知っているだろ？…少し見た程度か？」

ん…この声…懐かしいような…そう思った。

信じたくはなかった。

思い出した、この声の主を…

「どうやら俺が魔力を隠している事にすら気付かなかったようだな」

「悪魔神の分身体といっても、大した事はないな」

完全にこの声の主がわかった。

…俺の……

兄貴………？

「…何だ、眠ってなかったのか」

「久しぶりだな、雄地^{ゆっじ}」

「思い出した…確かにこいつはあの時の…」

最悪だ。

兄貴が何で？

どうなってるんだ。

「俺は俺の仕事を果たすか、お前らはここで消えることになる…」
「…一人足りないな？ 凧はどうした」

そうだ、凧だ。

兄貴には後で話をきけばいい。

妹はどこに…

「…知らんな、お前が知っているように見えるが」

「…知らないな、まあいい、お前らを消す」

「何で…兄貴が…？ どういうことだよ…！」

「俺は選ばれし者を消す、それだけだ」

凧は何処へ

兄貴は何の目的で

謎だらけの世界に、終止符をつつことはできないのか。

第三十二章 地獄の指輪…覚醒

「安心しろ、苦しむ暇もなく殺してやる」

「…お前がこの世界のキーか？」

「知らないな、無駄話をするつもりはない」

俺と術師はダウン、妹は行方不明。

戦えるのは悪魔だけ、もどかしい気持ちだった。

「…俺しか戦えるやつはいないが、まさかお前は負傷している者にまで手をかけようとするのか？」

「戦いで、相手が怪我をしているから手を抜く、そんなくだらない真似はしない」

「俺は俺の使命を果たす、お前達が自身の使命を果たそうとするように」

仮に兄貴が…この世界のキーだったとしよう。

悪魔に任せるなんて悔しい。

でも体はほぼ動かない…絶望しかない。

「…少しは楽しませろよ」

悪魔と兄貴が戦っている音だけがきこえてくる。

「…お前は大丈夫かよ？」

「問題ありません…もう戦えませんが……」

「それより妹君は…？」

「俺にもわかんねえ…体が…動かねえんだ、探しにすらいけねえ…」
参ったな。

例えたとすれば…そうだな。

体操のオリンピックの前日に負傷して出られない選手…みたいな感じだ。

こんなにも悔しいなんて、知らなかった。

「…一つ、体を動かす方法があります……」

「今の貴方に体力があるかどうか…ですが…炎で無理やり体を動かすことが……」

そんなことができるならやってやるよ。

腕がもげようと、足がもげようと。

しかし、もう体力も限界だ。

「…もし…限界以上に炎を使ったらどうなる……?」

「……死にます」

やっぱりそうか。

でも、俺は戦わなければいけない。

何でだろうか…そんな気になる。

その時だった。

「く…この身体も限界か…!」

悪魔の声がきこえた。

「…もう諦めろ、お前は確かに強い」

「しかし、俺の能力は完全無欠だ…お前に勝ち目はない」

悪魔が負けてるのか?

悪魔が負けたらどうなる…

悪魔も、俺も、術師も死ぬ。

妹も…?

なら、俺一人が犠牲になつてでも…

そんな力があるかどうかじゃない。

…やらなければならぬ。

「…俺、今まで逃げてたんだ…」

「……?どうしました…?」

「いつだってそうだった…」

面倒なことからは身を引く。

少しでも嫌なことは絶対にしない。

友達が不良に絡まれてる時だって、俺は逃げた。

…だって、そうだろ？

生き残ってナンボなのが人生。

辛い事も悲しい事も、すぐ過去になる。

…後悔するのは間違ってる。

「立ち上がるのに…遅いとか、そんなんねえよな…？」

「動け…動けよ…！！」

俺は立ち上がったことに気付いた。

そして、気付いた。

…地獄ヘルリングの指輪が俺を動かしていたようだった。

いつ指にはめたのか、さっきまではめてなかった。

…あれ？

体が思い通り動かない。

声が出ない。

「…雄地ゆうじ…お前動けたのか、死んだフリに近い真似をするとはな」

俺はただ無言で兄貴に近づいていた。

止まれ、止まれ、そう念じても俺は止まらなかった。

「…！！地獄ヘルリングの指輪を外せ！！」

悪魔の声がきこえた。

無理だよ、体が言うこと聞かない。

「^{ヘルリング}地獄の指輪…なぜお前が…！」

「…最悪だ、ここで目覚めるとはな…
「かつての…大魔王が…！」」

「もう飲まれたか、愚かな…俺の弟は本当の莫迦だったようだ」
「今すぐ楽にしてやる」

^{ヘルリング}地獄の指輪が目覚めの時を告げた

第三十三章 飲み返せ

「選ばれし者等といっても、愚かな…人間の集まりだ」

「お前はそれでも俺の弟だ、楽に始末してやる」

兄貴はそう言っつて、刀を構えた。

白い刀だった、黒刀とは真逆…白刀というべきか？

本当にまずかった。

自分の思い通りに体が動かない。

それだけじゃなかった。

地獄の指輪ヘルリングに宿る大魔王に飲まれたらしい。

「…大魔王は目覚めさせてはいけない！飲み返せ…！」

「大魔王…相手にとつて不足はない、いくぞ」

飲み返せと気軽にいつてくれるが、俺に残った感覚は目視することと聞くこと。

それだけしかなかった。

「武器すら持たぬとは、愚かだ」

兄貴は白刀を振りかざしてきた。

高速といつてよかった、目視がギリギリだった。

俺…いや、大魔王は左手一本でそれを止めた。

「…炎を纏っていないとはいえ、この剣を止めるとは…」

大魔王は残った右手で、黒い塊の炎を溜めていた。

「…この程度で俺を止めれたと思っっているのか？」

兄貴は刀を持った右手でリングの炎を使いだした。

急に刀は黄色の炎を纏い、たちまち大魔王の左腕は切れた。

しかし、俺には痛みがなかった。

…完璧に俺はコイツの中に居る。

「黄色の炎…雷による硬化か…」

「察しが良いな、珍しいだろ、だが俺の真骨頂は雷じゃない」
大魔王は悪魔と兄貴が話している間にもためらわず右手からレーザーを放った。

「左腕が切れて…動じないのか…いや」

悪魔がそう言った途端、大魔王に新しく左腕が生えた。

しかし、それは…まるで悪魔の腕だった。

俺の腕じゃない、途端に俺は恐怖を覚えた。

レーザーが放たれた爆炎の中から、兄貴が雷に纏われてでてきた。

「…炎がなかったら死んでいたぞ、やってくれる」

「…!!…その腕……大魔王が目覚めてきたか…趣味が悪い」

このままどうなる…俺は？

死ぬのか？

飲まれたら一生このままか？

…コイツを飲み返す方法はないのか？

……悪魔が飲み返せと言っていた。

方法がある…そう言っているようにしか聞こえない。

どうやったら飲み返せる？

…あの時俺は体力が限界にも関わらず炎を出そうとした。

普通なら死ぬ場面…そこではめていなかったはずのリングに魂を…

俺は何となくわかった気がした。

地獄の指輪ヘルリングを目覚めさせる方法…

それは、自身の魂を受け渡すことじゃないか？

それなら合点がいく。

あの時俺はなんとしても戦いたかった。

力が欲しかった。

ならばどうすれば飲み返せる？

こうして考えているうちにも大魔王と兄貴は戦う。
おまけに俺の体は…左腕がすでに悪魔の腕となっている。
冗談じゃない、早く飲み返さないと俺が俺じゃなくなる。
…どうすればいい…どうすれば…？

その時、声がきこえた。

(力が欲しいと…戦いたいと願ったのは貴様だろう?)
…誰だ?…お前は…?

(貴様が俺にすがつてきたも同然、俺はお前の願いをかなえた)
(…この大魔王の力を、貴様が願ったのだ)

…確かに力が欲しかった。
でも、違う。

俺が求めたのは、自身の力。
体力切れとか、そんなくならないことに屈する自分が嫌だった。
逃げてばかりの自分が嫌だった。

…俺は過去を否定していることになる。
それは今の自身を否定することにもなるだろう。
でも、人が変わるのに遅いことなんてない。
強くなりたい、人間として…そう思ったんだ。

(…貴様にいくら覚悟があろうと、力がないだろう?)
…そうだ。

でも、違うだろう?…違うんだ。
仲間がやられてる、その相手に勝てない。
だからって見捨てるのか?
どうせ他の人がやるだろ。

そうやって逃げるのか?逃げていいのか?
それが…人間の在る姿でいいのか?

男に生まれたからには、やらなきゃいけない時がある。
俺は、たとえ自分がいくら弱かろうと…

もう気にしないことにした。

…兄貴は敵だった。
それだけ。

妹探しに戻る。

第三十四章 現世へ戻り、新たな世界へ

「…この左腕、戻らないのかよ」

左腕は未だに悪魔…大魔王の腕だった。

「…知っているが教えることはできん」

「…どうということだよ？」

「自分で解き明かすものだ…一度死ねばわかるかもな」

薄気味悪い笑みを浮かべて悪魔は言った。

死ねばわかるって…俺が死ねば悪魔も死ぬんじゃないのか。

「…デーモンが居た、降りるぞ」

空中を飛んで探していた俺達は下降した。

「妹は!？」

「…どうやら居ないようですね…この世界に本当にいるのかどうか…」

「…そんなに探したのか？」

「いえ、リングの炎で人の気配を感知していたのですが…知っている気配はありません」

そんな手もあったのか、少し勉強になった。

「…そろそろ限界です、しばらく休みたいのですが…」

「この大陸にはいないようだ、別次元かもな…一旦現世へ戻るぞ」

「…そっか……現世って、戻れんのかよ？」

「当たり前だ、おそらく滅んでいるだろうが…大地ぐらいはあるだろう」

妹探しは断念するしかないようだった。

…それに、俺もこの世界にいるとは考ええなかった。

急に消えた。

そんな感覚っていつか…うまくは言えないけれど、とりあえずいいんだって。

「わかった、一旦戻ろう…っていつか!キーは結局…?」

「どうやらあの兄を追いだすことだったらしいな、新たな場所が増えた」

「…戻りましょう、といつても私はどこだか知らないので、お願いしますよ」

「案ずるな、お前も戻りたいと願え」

そうして、俺達は現世に戻った。

目を見開くと、見回す限りが大地だった。

「…家も人も…ないのかよ…」

「大魔王サタン…やってくれる、しかし本番はこの程度ではないぞ…
どうということかよくわからなかったが、疲れていたので休みたかった。」

術師も、相当疲労しているし、悪魔も…

「とりあえず、この場でもう寝て大丈夫？」

「人の気配はない、しばらく休んで新たな場所へ行く」

妹がいつ帰ってきてても、大丈夫なように。

旅を進めることにした。

…妹がどうなっているか。

どこにいるのか。

それは、旅をすることによってわかるような気がした。

どれくらい寝たのだろう。

目を覚ますと、術師も悪魔も元気そうだった。

…1日以上寝たことはわかる。

というか、悪魔は睡眠をとらないのにどうやって回復したのか。

「起きたか、では新たな世界へ行くぞ」

「…ん？この地図…周りに雲が記されているように見えない？」

「次の地はどこかわかる、いつも3つ目の世界は…天界だ」

天界？天国ということだろうか。

…死んだら行く場所と信じているんだが。
「行くぞ、手をかざせ」

…新たな世界へ

そつとまぶたを開くと、白い空間だった。

目の前には、扉があった。

第三十五章 天門の番人

「何の扉ですか…？とても大きいですね」

「天門だ、ここをくぐらなければ天界へ行けない」
目の前にとても大きい扉。

辺りはひたすら広い白い空間。

「…何か浮いてる気分になる、早くあけよう」
扉に手をかけようとすると、遙か上から音がきこえた。

「ん…大きな影と上からの音…まさか…」

上から2mほどの大男が降りてきた。

「どなたでしょう、まさか番人だったりします？」

「その通りだ、天門には…敵の進行を防ぐため、番人がついている」
大男がその時、俺達を指差しした。

「お前ら、何者、邪魔するなら、殺す」

「…あのー通りしたいな…なんて…」

滅茶苦茶怖かった。

なんだこの化物と思うほどのオーラを感じた。

…見た目は普通の大男だったんだが。

「…誰だか知らんが、ここを通してもらいたい、神に面会したい」

「神様、忙しい、面会不可能」

「…1000年如きで門番が変わるとはな…厄介だ」

「神から何かきいていないか？こいつらは選ばれし者だ…神も会いたがっているだろう」

悪魔と大男の会話は、社長同士の会話…そんな空気だった。

術師と俺は黙るしかない、重い空気というべきか。

「何も、聞いてない、お前、悪魔だな、悪魔、通せない」

「…どうしても通してくれないなら、使者を使って神に伝言を伝えてくれるだけでもしてくれないか？」

「悪魔の頼み、聞けない、悪魔、敵」

何なんだこの大男、言葉が不器用すぎる。

「…面倒だ、もういい……」

そこで術師がやっと口をはさんだ。

「何ですか？帰るんですか？諦めて……」

「交渉決裂だ、力尽くで通させてもらおう」

「お前ら、敵だな、殺す」

大男はこん棒を炎でつくりだした。

真赤な…紅蓮の炎、威圧感が凄かった。

「お前らは下がっている、門番は代々天界護衛部隊の隊長がつとめている、こいつはそこらの敵とはレベルが違うからな」

「…貴方の本体、取り戻さないと不便ですねえ…ではお言葉に甘えましょう」

「何言つてんだよ、一人に任せるなんて……」

「いいから、下がりますように、巻き込まれますよ」

術師は俺を無理やり後ろへ下からせた。

左腕の調子も試したかったんだけどな……

「悪魔、死ね」

門番はこん棒で悪魔を薙ぎ払った。

高速のスピードだった、悪魔の左肩に直撃し、悪魔は吹き飛んでいった。

「次、お前ら、殺す」

なんて強さだろうか、見た目にそぐわぬ速さ……

力は天下一品だろう、おそらく……

「…その程度か？」

悪魔は無傷で戻ってきた。

微かな笑みを浮かべていた。

「お前、無傷、何の能力だ」

「バカに説明してわかるものではない、じゃあな」

その瞬間、門番の顔が吹き飛んでいった。

術師も流石に少しひいたようだった。
むごいが、慣れてしまった気がする自分が…悔しい。

「早く行くぞ、神に会うまではただの殺戮者扱いされるからな」
門番をやったのは悪魔だろう…そう思いながら
また門へ近づいていった。

すると、少し後方から声がきこえた。

「少しお待ちを願いたい」

「…誰だ?! これはこれは…今の門番はただの兵士か」

「…久しいな、天界護衛部隊隊長、ラファエル」

今の門番は雑魚兵だったのだろうか、これからどうなるか。

「…また会えた事を神に感謝します、悪魔神…いや、本体ではない
ですか?」

「…どこに眠っているのやら、だ」

「…そちらの方たちが、選ばれし者ですね」

「ど、どうも…?」

何か不思議な気分だった。

ラファエル…天使だろう、おそらく。

何か癒されるような感覚だった。

優しい感じ、そうあらわすのが一番楽だろうか。

「私が案内します、今の兵のことは…御気になさらず、ついてきて
ください」

そういうとラファエルは一瞬で扉の前に移動し、扉に手をかざした。

すると、扉が瞬く間に開いた。

「久しぶり場所だ、相変わらず平和のようだ」

とても優雅な光景が、目に入ってきた。

第三十六章 神との面会

「では、神のもとへ参りましょう」

さっきの門番：兵は、力を試すためのものだったのだろうか。
急にふとそんな気がした。

「あの…神なら何でも知ってますか？」

「知りたいことは、神に面会してから直接きいて下さい」
そう言つて天使は黙々と歩き続けた。

術師も、悪魔も何か考えにふけつていているようだった。

辺りを見回すと、小さな子供から大人まで、皆笑顔だった。

天界は、とても平和な場所なんだと一目でわかる。

とても広大で、端が見えないほど広い土地に

たくさんの人々、家も転々とあつた。

「……大魔王サタンが復活しているのは御存知か？」

悪魔がやつと口を開いた。

「…今年で1000年目、今から徐々に力が戻っていくところでしょ
う」

「そのことで疑問視することがある、大魔王サタンは力が3割戻つ
ているといつていた、現に現世を瞬く間に滅ぼした」

「！…そこまで力が戻っているのですか？予想外に早い回復ですね
…」

ここで選ばれし者のことも、大魔王サタンのこともわかるのだから。
か。

謎が多すぎるから、少し不安だった。

それに妹のことも…

「今までこのようなことはなかった、それに…復活した姿は完全体
のようだった」

「?…どういうことですか…完全体は完全に力が戻ってからしか…」

「仮に…本当に3割の力である姿に戻っているということは、何か

新たな力をつけたようだ」

「それに、N人間ネオヒューマンという新たな人種まで…いや、人間を強化してつくりだしたようだ」

「…厄介ですね、とにかく神にこの事態を知らせることも優先させてもらいます」

「無論だ…それより神は元気なのか？」

「なんなのだろうか、この会話は。」

「術師も俺もついていけない、というか術師は何を考えているのだろうか。」

しばらくすると、神がいるという場所についた。

「宮殿のようだった、とても広くて綺麗だった。」

「少々お待ち下さい」

そう言つてラファエルは宮殿の中へ入つていった。

「なあ、お前さつきから何考えてんだよ」

「いえ…天界があまりにも素晴らしい場所すぎて、驚いているだけです」

確かに素晴らしい場所だが、術師がそんな事に感心するとは思えなかった。

「先に言つておく、神の前で失礼な態度をとるな、側近達に殺されかけても俺は助けない」

「ええ、わかつています」

…黒騎士の話を思い出した。

神はこの悪魔の愛人だといっていたことを。

それがどうにもひっかかっていた。

その時、ラファエルが戻ってきた。

「大丈夫です、入つて下さい、私は半歩後ろからついて参りますので」

俺達は宮殿の中へ入った。

そこも中は真っ白な空間だった。

本当に何も無く、少し不安を覚えた。

「お久しぶりです」

声が聞こえた。

とても美しい声だった。

しかし、どこか幼さを感じた。

「…久しいな、急に訪問して済まない」

「それが貴方達の使命ですから、気にすることはありません」

神の全貌があらわとなった。

術師も俺も目がとびでんとばかりに驚いた。

…神は見た目が12から14歳ほどだろう、子供だった。

白い肌に、美しい黄色と白色が混じった髪。

本当に神なのか、そう疑ってしまうほどだった。

「初めまして、選ばれし者方…どうぞ、気楽になさってください」

神はそう言ったが、少し後方に側近が居るのがわかった。

「では、本題へ参りましょうか」

「相変わらず鋭いな、しかしその前にきかなければならないことがある」

本題が何か気になったのに…そんなこととても言えなかった。

「…そちらの方の、妹さんのことですね？」

「その通りだ、居場所…わかるか？」

どこまで鋭いんだ。

そう思ったが、神ならば…と思ってしまう。

今までの戦いも全て見てきたのだらうか。

なら、この左腕のことも教えてほしいな、なんて…

「別次元にいるようで…私にも探しようがありません、しかし…」

「そちらの方の兄が連れ去った、ということはわかります」

やっぱりそうだったのか。

護れなかったことが悔しくて、後悔の念にかられた。

「…あいつはかなりのつわものだった、何者かわかるか？」
「そうですね…何かの組織が裏で動いているようです」
「私の予言の力でもそこまでしかわかりません…」
予言の力…なんか、物語の定番っていう感じだ。
しかし、これはアニメやドラマじゃない、本当のことなんだ。
「本題へ移つてもよろしいでしょうか？」
「ああ、本題…言わなくともわかっていると思うが…」
「大魔王サタンについてだ」

いよいよ、大魔王の謎が明かされる。

第三十七章 戦争への縮図

「大魔王サタンについてまず知りたいことは…」

「奴が既に完全体になっている、ということについてだ」

術師と俺は会話にはよれないから、もちろんじっとしていた。

少し退屈な気分でもあったが、謎が解けるといっのは期待感もある。

「私から言えることは、年々大魔王の力が増していつているということですよ」

「何度倒しても、1000年の時を経てよみがえるのはもちろん、

その間に力が少しずつ回復する勢いを余って増殖しています」

つまり月日がたつ度に強くなるということだろうか。

3割の力しか戻っていないと、そのような事を言っていたが

あれで本当に3割なら恐ろしい力だとうかがえる。

「その通りだ、恐らく更なる形態が増えているだろう、倒すことは…今までよりも更に困難だろう」

「…大魔王サタンについての本題はそれではないでしょう？」

「ああ、大魔王サタンを完全封印させる手についてだ」

「1000年に一度、あんなやつを相手にする必要がはたして本当にあるのか…」

「昔から言っているはずですよ、封印するのは…一つだけ手がありますが、現状ではリスクが大きすぎてとても無理なのです」

「わかつている、しかし…いずれは止めなければいけない、今回は特に…謎が多すぎる」

「組織の事は勿論、大魔王サタンがどう関与しているのかも…含めてな」

俺の兄貴が何らかの組織に所属していて、その組織がどう大魔王サタンと関与しているのかということか。

兄貴は結局…何だったのだろうか。

「大魔王サタンの能力を止めるには、今回がラストチャンスだと思

っている」

「年々力が上昇する相手に、討つ術が無くなる前に…ですか、わかりました」

「そこまで仰るのなら、これで最後にしましょう、大魔王サタンを完全に封じます」

「…勿論リスクはわかっていますよね？相手を永久に異次元に閉じ込める為のリスクが…」

「ああ、封印術をかけた者は、大魔王サタンと異次元で永久に過ごすことになる」

「…その封印術を覚えているのは、俺と…神だけだということだ」
「天上神か、悪魔神か…どちらかが消えゆく宿命になるのです」

…その後教えてもらった。

大魔王サタンの能力とは、倒されても死ぬ前に自分自身に封印術をかけることにより

1000年異次元で一人力を蓄える…回復できる能力。
その異次元に永久に留めておく犠牲役が

天上神、つまり今の神か…悪魔神、地獄の神力オス…あの悪魔か。

少し休んでいる時だった。

「大変です！神様、地獄界から…戦争を挑まれました！」
「…まさか、今そのような問題を…」

「俺はそんな命令をした覚えがないんだがな、どうやら1000年俺が居ない間に新たな神がたてられたようだ」

それから徐々に事態はとんでもないことになっていく。

天界vs地獄界…戦争へ

第三十八章 戦争宣言

「事態は非情に大変なものとなっており…特殊作戦部隊が現在南の方で現在交戦中です！」

地獄界がいきなり天界を襲うなんて事はおそらく今までなかったのだろう。

かなり困惑とした状況で、対応が間に合わないほどだった。

「…それで、地獄界が天界を襲ってきた訳は？」

「それが不明で、現在確認のほどを急いでおります！…新たな地獄の神から、神へと連絡の映像の要請が…！繋ぎます！」

急に空中に映像が浮かんできた、何の原理かはわからない。

「第12代：天上神よ、我は13代悪魔神ハデスだ」

「第12代天上神：ヘカテーです、まずは何故急遽に新たな悪魔神がたてられたのかを御説明いただきたいです」

「今から1000年前、第12代悪魔神カオスが行方不明になったのは御存知であろう…正しくは分身体はいるが…今の力では地獄を支配する事などできん、地獄界での意見を取り留めると、我が時期悪魔神に相応しいとの結果が出た、そこで我が第13代の地獄の神…悪魔神になることを決めたのだ」

「1000年もの空白を埋めるため、我が悪魔神になったに過ぎぬ」

「…成程、では其方が天界を急に襲ってきた訳は？」

「大魔王サタンと手を組んだ、手を組む為の此方からの条件は、大魔王サタンが地獄界のみ制圧しないこと、大魔王からの条件は、天界を滅ぼす協力をする…だ」

「何故大魔王サタンと手を結ぶなんてことを…」

「大魔王サタンの力は絶大だ、おそらく地獄界全員が団結してやっとなめられる程の力はあるだろう、それならば天界を滅ぼし、地獄界を安定させるのが我のつとめでもある」

そこでやっと、悪魔が口をはさんだ

「そんな事を、俺が許可した覚えは無い、第一新たな悪魔神を継承する儀式を俺は行つてはいない、お前が13代悪魔神になったのは不正だ」

「既に貴様は地獄界の名簿リストにも乗っていない、貴様は悪魔神の座を剥奪されたのだ、もはや貴様に地獄界を動かす権利等無いのだ」

「…いいでしょう、わかりました、なら第12代天上神ヘカテーの名におき…ここに天界と悪魔界との戦争を此方も認めます」

「天界といえど地獄界と大魔王サタンが手を組んだ軍では勝ち目があるまい…ではな」

そう言い残し、映像は切られた。

「すみません、まさかこのような事になってしまつとは…」

「気にするな、大魔王サタンと手を組まれた今、滅ぼす他無い、俺達も協力する」

戦争は強制参加、しかし仕方のない事なのかもしれない。

「では私は全軍の指揮をとるため、少し出てきます、貴方達は…死なない程度にお願いします」

そう言つて神はどこかへ消え去つた。

「いいか、俺達は敵の指揮官、つまり悪魔神ハデスの首を殺る…あそこまで言われて黙っている訳にはいかない」

「…ですが、貴方の本体が無ければ…勝ち目がないかと」

「現状ではそうかも知れない、他の悪魔との戦いで急成長してもらう必要もある」

「嫌だぜ、悪魔神つてことは鬼ほど強いんだろ?…そんな奴と戦うなんて…」

「大魔王サタンはもつと強い、丁度良い布石だ…それに案ずることはない、お前にはまだまだ無限の可能性が眠っている…ひよつとすると、今回の戦いで化けるかもな」
「どういう意味なのかはわからなかったが、断って戦わないわけにもいかない。」

「まずは腕慣らしだ、敵の主力部隊を叩く」
冗談じゃない、しかし強くなることは今後必須なことだ。

「…行きましようか、久々に暴れましよう」
久々じゃないつつーの…と思いつつ覚悟を決めた。
…^{ヘルリッゲ}地獄の指輪を左人差指にはめておいた。

これから、戦争が始まる。

うだった。

「さようなら、来世で平穩に過ごせる事を祈れ」
剣をおろしてきた、猛スピードで。

死の直前になると、ゆっくりに感じるのもわかる、なんて矛盾だろうか。

ギンッ！！

ああ、死んだ！

そう思った時には、白銀の剣を悪魔：カオスが素手で止めていた。

「これは：何と懐かしき顔か、悪魔神カオス」

「久しいな、お前が戦場におもむくとは余程のことだな」
そう言つて、カオスはその悪魔を蹴り飛ばした。

正確には、相手はギリギリで腕で止めており、少ししか飛ばなかった。

「私は7番隊隊長ウエルデレト、改めて宜しく頼む：反逆者よ」
相手はそう言い、カオスに斬りかかった。

「冗談にも程がある」

悪魔ウエルデレトと悪魔神カオスは対等の勝負を繰り広げていた。
術師は後方で火の塊を放つてくる敵を遠距離から攻撃していた。

俺はカオスに加勢するしかないと考え、イメージをした。

…相手を拘束するイメージ、鋼の鎖で。

悪魔ヘルリングの指輪に炎を灯し、投影した。

悪魔ウエルデレトの肩や腰や足や、ほとんどの部位が鋼の鎖で止められた。

「…あれは悪魔の指輪！此処まで出来るとは油断した」

「一回目の死亡だな」

カオスは黒炎で相手を攻撃した。
どうなったかはよくわからなかった。

「隊長つて、言つてたけどあんなもんなのか？」

「隊長格は今の俺より皆遙かに強い、それぞれが凄まじい特異能力を持っている」

「ウエルデレトの場合は……」

「覚えてるようだな、私の能力を」

悪魔ウエルデレトの身体が、高速で再生していた。

「選ばれし者よ、覚えておくが良い、私の能力は…不死だ」

「不死身つて…！？ありえないだろ…！」

「正確には、自身の炎の力で何度でもよみがえる能力だ」

つまり回復術の中でも、最も優れた能力といったところか。

「さて、修羅場というべきか…今の状態でこいつを倒すことはやはり不可能だ」

「その通り、潔く死を認めることも時には必要なこと」

ウエルデレトは左手を前に翳し、何か力を溜めているようだった。

「まずい！炎でガードしろ！」

「へ………？」

その時ウエルデレトの左手から、莫大な量の炎が出てきた。

これは護りきれぬレベルじゃない。

「くそ…！」

悪魔が俺の正面にたって護っているのが少し見えた。

そこからは記憶が途切れていた。

第四十章 質問

重いまぶたをゆっくりと開くと、真つ暗な部屋に居た。

身体を動かそうとしたが、何かで手足を括られていて動けなかった。

「何だよ…これっ…!!」

全身でモゴモゴと動こうとしても、ほぼまったく動けなかった。

「…起きましたか、やっ」と

術師の声が聞こえた。

「デーモンか？ここどこなんだよ…」

「私にわかる事は…敵の隊長に捕まったということですよ」

7番隊長ウエルデレト…だったか。

そこで思い出した、敵の炎の技をくらい…それから意識を失ったことを。

「そつだ！悪魔…カオスは!？」

「…今は別部屋で…向こうの隊長と話し合ってるそうです、拘束されたまま…」

「とりあえず今ここに敵がいらないなら…脱出しようぜ!」

俺はそこで気付いた、リングが無いことに。

指にリングをはめている感覚がなかった。

「この部屋…投影術すら使えないようです」

「冗談じゃねえ…！何が何でも出るっ…」

幾ら力を入れても、手足を括っている何かを外すことはできなかった。

「力尽くで出るしかないですけど…この手足を括っている縄、特殊な魔術で強化されているようで、外すことがままなりません…!」
どうすれば出れるか。

そんなこと、へたれでバカな俺にはまったくわからなかった。

その時、どこかの扉が開いた音がした。

「元気か？…選ばれし者達」

ウエルデレトの声だった。

「身動きが取れないんです…元気なわけがないでしょう」

「随分と反抗的な発言だな、君達の命は私の手中にあるという事を忘れないでくれ」

「殺さず…手足括つておいて、何のつもりなんだよ！」

「君達にも、悪魔神にも、聞きたいことがあった…それだけだよ」

「いや、正確には君達にしかもう聞きたいことはない、質問に答えてもらおう」

随分と趣味の悪いことだ。

悪魔つてのは…どいつもこいつもこういう奴なんだろうか。

「暗闇の中で…質問にだけ落ちついて答える事なんて出来ません、せめてあかりを…」

「君は…いや、どちらとも脱出を考えているだろうが、それは無理なことだよ」

そう言つて、カチツという音がきこえたと同時に、部屋中が明るくなった。

ウエルデルトは、あの時持っていた白銀の剣を腰につけていた。

…警戒されているのは当然のことだが。

「さて、質問を始める」

「ちよつと待つて下さい」

「…何だ？君はさつきから好奇心旺盛だな、何か良い事でもあったのか？」

「…どうせ殺されるのに、質問に答えると思つているのですか？術師は喧嘩腰というより、挑発というより…何か、気になることが他にあるようだった。

「大丈夫、質問にだけ…全て正直に答えてくれたら殺しはしない、正確には…まだまだ殺しはしないというだけだが」

「いいから、質問だけ早くしてくれよ…」

思つていた事がつい口に出てしまった。

術師がこいつは…という顔でこつちを見ていた。

ウエルデルトは少し微笑していた。

「なら一つ目の質問だ…最近怪しい組織がある裏で活動している…知らないか？君の兄も入っている組織なんだが」

その時思わず絶句してしまった。

まさかここで俺の兄貴の話が出るなんて、一番意外だった。

それに何で俺の兄貴の事を知っているのか…

「なんか…変な組織っぽいのはわかるけど…それが何なんだよ」

「…いや、この質問はいい、次の質問」

「君が持ってた地獄の指輪ヘルリング…これ誰から受け継いだ？」

「…別世界の、とある魔王から」

一体何が本当にききたいことなのか。

いきなり次はリングの話になるなんて…

「じゃあまた次の質問…その左腕、何なんだ？」

「地獄の指輪ヘルリングの…中に居る大魔王の左腕、悪魔の腕らしい」

「…！それいつの大魔王かわかる？」

「知らねえ、まだ1回しか話したこともないし」

俺がこの腕のことを知りたいぐらいだった。

「フン、じゃあ最後の質問だ…」

随分とウエルデルトは溜めて言い放った。

「…大魔王サタンを…悪魔神ハデスを、倒したいか？」

急展開へ。

第四十一章 協力と目的

「倒したいか…って」

コイツは何が言いたいのだろう。

コイツは何が聞きたいのだろう。

コイツは何が目的なのだろう…

「答える、倒したいかときいている」

俺はどう答えればいいのかわからなかった。

「無論、倒す為に…それが使命ですから」

術師がそう答えた、素直に俺も答えればよかったのだろうか。

…しかし、何だろうか、この違和感。

質問をする為だけに俺達を生かしているハズもないと思った。

「…どうだ、手を組まないか？君達にも悪い条件ではない、お互いが得をする…」

「！？何言ってるんだ、お前は俺達の敵で、俺達はお前の敵で…アレ」
頭がパニック状態すぎて、何が何なのかなんてもうさっぱりだった。

「つまり…私と手を組んで欲しい理由は二つある」

「一つ目は大魔王サタン…及び悪魔神ハデスを倒すには君達の力が
必要だから」

「二つ目は…私はこの戦争に反対だからだ、突然天界を襲うなんて
野蛮な事を…それに大魔王を手を組んだのも気に食わないことだか
ら」

…もつとわかりやすくすると、だ。

ウェルデルトにとって、サタンやハデスは邪魔者。

その邪魔者を消す為に、俺達を利用しろって腹だ。

天界を襲う事が反対だなんてことは、きつと嘘だろう。

そう考えていたときに術師は言った。

「成程…しかし貴方にとってそれはリスクが大きすぎる、しかし…
自分が次の悪魔神の座につき、用が済んだ私達を消しさる為にはそ

の方法しかないということですか」

きつと確信だったのだろう、その言葉は。

ウエルデルトが少し驚いて見せたようだった、しかし僅かに微笑していた。

それからしばらくして、俺と術師は縄から解放された。

無論、リングはまだ返されなかった、逃げるのは無理だし勝つのも不可能だと術師と俺は自然に理解していた。

「悪魔神：カオスに会わせてやる、しかし私はあいつを解放するわけにはいかない」

「…逃げられたら困るとか？」

「その通りだ、私の野望の為に…フフ」

ウエルデルトは薄気味悪い笑みを浮かべた。

身の毛がよだつほどだった。

カオスが居るといふ部屋に入ると、中ではカオスが悠長に椅子に座っていた。

「な…！？あの縄からどうやって抜け出したというのだ！」

「お前の目的を知る為に黙っていたに過ぎない…汚い事を考えるものだ」

カオスは全て知っているようだった、これで少しは助かった気がしたというものだ。

「…君も協力するののか？」

「こいつ等が戦う意思を見せたなら、俺は協力しないといけないことになっている」

「いいだろう、なら今回の目的について説明する」

ウエルデルトは少しため息をつくように説明しだした。

「今回の一番の目的は、悪魔神ハデスを倒すこと…ついでに、1, 2, 3, 4番のあたりの隊長を倒せば嬉しい、いずれも私よりは

強い隊長だ」

本当に時期悪魔神の座につくつもりなのだろう。

自身より強い敵は倒す、それだけが目的のようだった。

「今のままでは勝つ事は不可能だ、隊長の面子も変わっていないの
だろう?」

「全員変わっていない、故に能力はわかったからと侮るな」

「…ハデスの能力や強さ等知らんが、問題は4番隊長だろう、アレ
は俺でも手に負えん」

「あいつは本当にできればいい、ハデスを倒すことが第一だから
な」

「さっき今のままでは勝つ事は不可能といったか…故に修行をして
もらっ」

また修行かよ、そう思う気持ちもあったが、強くなれるのは嬉しいか
った。

それより、その4番隊長つてのはどれほど強いのか…ハデスもどれ
ほどなのか。

それが一番気になることだった。

「人間の力であいつ等に勝つレベルに到達するには、限界突破しか
ない」

「…一度死を味わってもらっ」

一体

!?

第四十二章 限界突破

「人間の力には限りがある、それが悪魔のレベルに追いつくことは未来永劫ないだろう」

俺達は修行場のような場所にきていた、詳しく場所はわからなかった。

周りはガレキの山や、何かの惨害、酷い荒野だった。

「故に 限界突破、それを習得してもらう必要がある」

「きいたことがあります、人間の本来の力を100%出せる状態…それが限界突破」

「いかにも、人間は本来30%の力も出していない、身体が危険故、脳にリミッターがかけられているといっても過言ではない」

「…その状態を常に引き出すには、一つ条件がある」
随分と勿体ぶる口調でウエルデルトは言った。

「その条件とは、その状態に身体が耐えられるようにすることだ」
よくよく考えるとそれは当り前のことだ。

身体が耐えれないから脳が身体に制限をかけているとすれば、身体が耐えられるようになれば脳は制限をかけなくなる、それが自分でその状態を引き出せるようになる。

「つまり…身体を鍛えろということですか？」

「簡単にいうとそういうこと、勿論もつと奥深いことだけど」

「本当に単に身体を鍛えるだけだと、1000年は軽くかかる、それを…3日で鍛えてもらう」

「死デスマーチの行軍…通常では耐えきる事は不可能、成功する可能性は2%未満…それをやってもらう」

耐えきれない＝死ということだろう。
意味深な顔をしていた、しかしやらなければならぬという空気だった。

「勿論、私はしますよ、強くならなければこの先に進めません」

「ん、俺もそれ！…やってやるよ」
焦って便乗してしまった、言ってしまったからにはやらなければならない。

「死の行軍^{デスマーチ}…相手は悪魔神力オスにしてもらおう」

「フン、俺は構わないが本当にこいつ等が死ぬ可能性が高い」

「そうしないと前へ進めない、フフ…全力で相手してやってくれ」

それから死の行軍の内容が説明された。

…3日間、炎を常に放出し続けたまま力オスとの戦闘訓練。

更に、特殊な蓮の花を飲んで。

その蓮の花は、飲むと3日間ほど炎が垂れ流しになるそうだ。
通常なら約1日で炎が無くなり、死ぬ。

これがいかに難しいか、それを俺がまとめよう。

・炎は一定量放出し続ける、つまり力を出し続けるのと一緒の状態を続ける。

・炎がすぐに回復することはない、力が尽きてくると脳の停止…死を意味する。

・相手は分身体とはいえ悪魔神、今の状態で勝つことは不可能ということだ。

「蓮の花を飲み、炎が一定量放出され続けたまま戦い、3日間それを続ければ限りなく身体能力が上昇する、つまり限界突破の一手前の状態まで辿り着く」

約1日で尽きるはずの力、休む間もなくそれを3日…

通常なら死ぬ、ならばどうすれば生き残れるのか、それはやってみないとわからなかった。

地獄の死の行軍が始まる。

第四十三章 死の行軍、開始

この種を飲め、飲んだ瞬間：開始ね」

俺と術師には蓮の種が渡された。

リングは勿論、前もって指にはめていた。

後はこの蓮の種を飲むだけで全ての準備ができる。

俺と術師は躊躇ためらいなく蓮の種を飲んだ。

すると身体が少しずつ暖かくなったような、温もりを感じた。

「開始だ、お互い全力でし合うことだ」

そう言つて、ウェルデルトは消えた。

「：死して自身に残るモノは、肉体の残り粕だけだ」

カオスはそう言つて、翼を広げた。

…微かに見える気がした、全力で突っ込んでくる様が。

俺はリングに炎を灯したが、そこであることに気がついた。

「な…！俺って武器持ってないんだっただ！」

「少し下がっててください！」

術師が俺の前に出るが、術師はうまく炎が扱えないようだった。

その証拠に、術師が炎でつくりだそうとした槍は、ぐねぐねに曲がっていた。

「炎が放出されたままだから…うまく扱えないようです…！！」

炎を使いすぎるのは命取りであり、失敗は最も危険な行為だとわかった。

その時カオスが俺に向かって突っ込んできた。

予想通りとはいえ、あまりのスピードには絶句した。

カオスは俺の一手前で、少し回転して蹴りを俺の顔面に向かってしてきた。

早すぎて、俺自身が反応できたのは…左腕でその蹴りを止めてから

だった。

「…！魔王の左腕をそこまで扱えるとはな」

「反射神経が良かったみたいだ！」

俺は左腕を動かしたつもりはなかった。

しかし反射条件のようなモノだと…その時は思っていた。

俺はなんとか炎をさらに放出するイメージをし、それを右手に溜めた。

その瞬間に術師が背後からカオス腹をぐねぐねの槍で貫いた。

「フン…肉を切らせて骨を断つという」

カオスはそう言い放った後、左翼で術師を吹っ飛ばした。

俺は驚いて、炎を放つという動作を忘れていた。

「この程度で動揺するのではまだまだだ」

悪魔は左腕に掴まれていた足を離し、俺を更なる蹴りで吹っ飛ばした。

「くそっ…！」

俺は吹っ飛ばされている最中にカオスに向かって炎を放った。

レーザーのようなものをイメージしたつもりが、炎の玉といった形だった。

その炎の玉を、カオスは右翼だけでかき消した。

そこで術師が言った。

「今の…幾ら風圧が強かろうと炎をかき消すなんて事はありえません」

「目視はできませんが…おそらく鎮静力ちんせいりょくを持った炎を宿しています」
「その証拠に…身体の動きが鈍くなっていますしね」

そう言われて俺も気付いた、身体の動作が鈍くなっていることに。

「察しがいいな、だが気付いても…何も抵抗することはできないみたいだな」

カオスの腹をよくみると、術師が槍で刺した傷が完全に癒えていた。
「それだけじゃありません…傷も癒えています、これは幻術ではな

い……」

「高速再生能力といったところでしょうか…恐ろしい力だ」

術師の察しの鋭さには俺が悲しくなるほどの何かがあった。

「その通りだ、不死とまではいかないが…かなり再生能力が優れている、臓器も再生する…肉体の再生速度よりは遅いが」

再生能力は反則としかいいようがない。

俺達の攻撃力じゃおそらく…傷を与えても、すぐに回復される程度だろう。

「そろそろ茶番は止めるか、お前達も全力で来ていいんだぞ」

カオスはそう言って、白光した槍のようなものをつくりだした。

「……己の内なる力に気付かなければ本当に死ぬぞ」

俺に向かって全速力で低空飛行してきた。

俺はすかさず動こうとしたが、身体が言う事をきかなくなっていた。カオスは有無を言わず俺の心臓を目掛けて槍を突き刺そうとしてきた。

後数センチ…それだけの距離というところで、その攻撃を俺の左腕が止めた。

そこでようやく分かった。

この左腕は俺の言う事をきいていない、独自で動いていると。

「…どこまで動く!」

カオスは右翼で更なる攻撃をしようとしてきた。

流石に終わったかと思った時、身体が僅かに動けるようになっていく事を感じた。

右翼で薙ぎ払おうとした攻撃を、俺はギリギリで避けた。

その時、カオスの動きが止まりだした。

左腕が勝手にカオスの持つていた槍から手を離した事によって、俺はかろうじて立ちあがり動くことができた。

「…どうやら間に合ったようです」

術師が死デスリングの指輪に紫色の炎と灯していた。

「もしかして、幻術にはめたのかよ…!?」

「ええ、なんとか…体力はかなり消費してしまいました」

「…どんな幻術にかけたんだ？」

「金縛りの幻術と言つて、全身が動かなくなる幻術をかけたんです…時間稼ぎをしないと体力が持ちません…3日なんて、ありえないと思いませんか？」

「…！確かに、こんな修行で本当に力がつくのかも謎だけどよ、まさか嘘つてわけじゃ…」

俺の言葉を遮るように術師は言つた。

「それです、本来…人間が持てる炎の量…つまり精神的な力ですが、それは限られています、普通の人が1日で尽きるならば、どれだけ持つても3日はいかないでしょう…」

「おそらくこの修行の本来の目的は…」

その時、何者かが術師を吹き飛ばした。

俺は啞然とするしかなかった。

第四十四章 真の目的！？個別指導へ

俺はただただ目を見開いた。

術師を飛ばしたのは、ウエルデルトだった。

「てめえ…！何のつもり」

遮るようにウエルデルトは言った。

「こつも早く真の目的を理解されるとは思わなかった」

「フン、俺からしたらやつと気付いたかということだが…もう小

一時間は過ぎた」

背後から力オスの声がした。

「死の行軍の真の目的は、蓮の種を飲んで体力が減り続ける中で丸

一日限界の状態までの個別指導をするということだ」

「限界ギリギリを味わうとき、人間は予想外の力を発揮する…それを

をコントロールできるように身体に染み込ませるのが死の行軍」

まだ俺にはその言葉の意味が理解できていなかった。

「ならなんで…こんな遠まわしなやり方に！」

「お前達の知能をはかることも兼ねようと思ったただけだ、もしあのまま続けていれば死ぬことになっていたが」

「じゃあ本題へ行こうか」

「本題…？」

「個別指導、悪魔神力オスが君を鍛える、あの術師は私…」

「勿論命懸けの全力勝負を限界までしてもらおうよ、1日耐えるまで蓮の種は炎を出させ続ける」

それから少しして、本当に個別指導…一対一の戦いが続くことになった。

「言っておくが、俺は始めから全力で行く…お前も全力を出せ」

「俺は武器無しなんだぞ！？冗談じゃねえって」

「　　そうか、ならイメージしてつくりだせ」
そう言つてカオスは白光している槍を構えた。
「行くぞ、構えろ」

そう言われて、俺が気付いた時にはもう目の前まで槍がきていた。

「　　ッ！！」

ギリギリで避けたが、頬が少し切れたのが自分でもわかった。

俺はとっさにイメージした、漆黒の剣を。

「！！槍に剣で挑む気が…面白い」

漆黒の剣はうまくつくれたほうだが、黒刀よりは短くて頼りがいを
感じれなかった。

「全力でつて言われたんだから、全力で行くぜ！」

俺は剣でカオスに頭から斬りかかったがあっさりと避けられ蹴り飛
ばされた。

「全力がその程度ではないだろう？…使つていいんだぞ」

「…？何をだよ…！！」

さつきからダメージをくらい過ぎたのもあるが、蓮の種のせいもあ
つて体力がもう尽きかけていた。

「地獄の指輪ヘルリング…はつきり言うが、それはお前の主力の力に成り得る」

「大魔王の力を使いこなせるようになるのもこれからの戦いには必
須だ」

飲まれるかもしれない嫌だった。

それだけじゃない、自分から使う方法なんて俺は知らなかった。

その時、俺は油断していた。

「…興奮めだ」

カオスの白光した槍は俺のわき腹を貫いていた。

「嘘…だろ…？」

意識が遠のいていく。

その時、声がきこえたんだ。

(俺の力を使わないといけないんだろう?)

(安心しろ、俺はお前に死なれると困るからな…フハ

ハハハ)

「ウガア、アア、アア、!!」

意識が乗っ取られたのか?

身体が乗っ取られたのか?

…どうやら後者のようだった。

「大魔王…目覚めたか!」

「俺を呼んだのは貴様だ…遊んでやるぞ」

大魔王はわき腹に刺さった槍を一瞬で抜き、その槍でカオスの左胸を貫いた。

「フハハハハ!!いいぞこの身体!久々に楽しめそうだ!」

大魔王はすかさず手に持っていた漆黒の剣でカオスの喉を貫いた。

「もう終わりか!?フハハハハ!」

大魔王は左手で光線を放った。

俺は何も感じないが、これは相当な一撃なのだろう。

地面が真っ二つに割れていた。

くそっ、もういいから身体戻れよ!

俺はそう思っただろうすれば飲み返せるか考えていた。

「…成程、左腕だけでそこまでの力とはな」

カオスの声が出た。

カオスは完全に傷が再生していた。

「貴様：超速再生か、俺と同じ能力を持っているとはな！」

「　　だが左腕だけでは、不便だろう？」

何かが、大魔王の右腕を切断した。

正確には：俺の腕だった。

「…！この男：雄地の肉体を無くしたがるのか、力を増幅させる為に…！」

「雄地がお前の力を操れるようになれば問題ないだろう」

「…：両腕でいいだろう、雄地に飲み返される前に精々俺が遊んでやる」

「貴様：今までで最高に面白い奴だ…！」

大魔王の右腕が再生した。

俺の身体：一体どうなるのか。

いよいよ、大魔王の力を知る事になる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4222i/>

夜空のムコウ

2010年10月10日01時12分発行